

393
T045
㊦



0056853-000

393-T045ウ

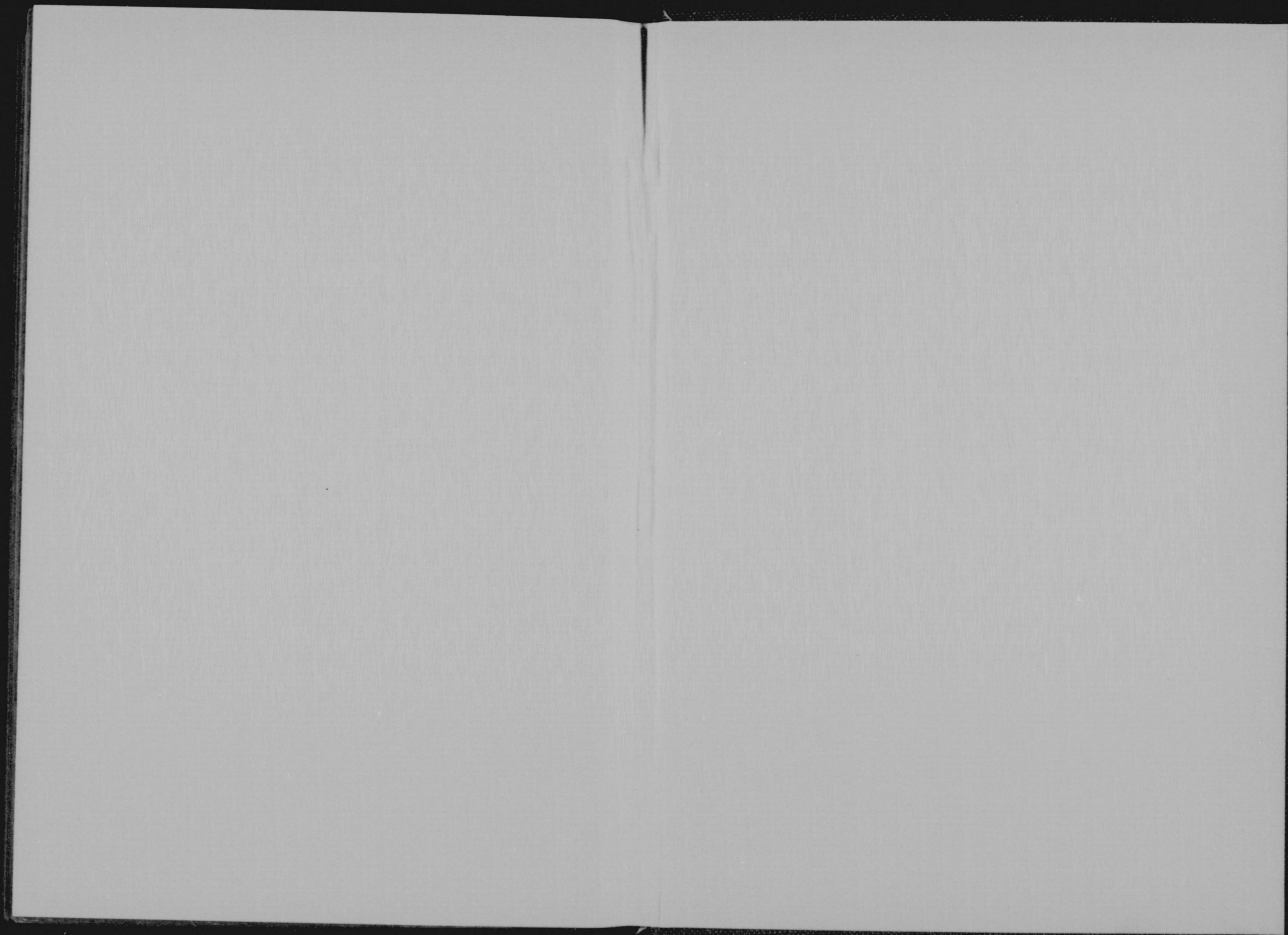
必勝国民読本

蘇峰徳富猪一郎・著

毎日新聞社

昭和19

AJD



H22M-29

蘇峰 德富猪一郎著

必勝國民讀本

每日新聞社刊

393
P.45
⑤



蘇峯德富猪一郎著

少勝國民讀本

每日新聞社刊





對米英宣戰の大詔

詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ 昭ニ忠誠勇武ナル汝有眾ニ示ス
朕茲ニ米國及英國ニ對シテ 戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ
抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ丕顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト齟齬ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ牆ニ相閱クヲ悛メス米英兩

國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス 剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク 徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲驟然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ 速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名 御璽

昭和十六年十二月八日

緒言

大東亞戦争も滿二年に近づいた。予は近年病に冒され、昨年の如きは其の大過半を病床に送つた。本年病偶たま閑かん有り、専ら修史の業に親しんでゐる。然るに最近我が青年學生諸君の奮發興起を見て、老、病を忘れ、聊いさか報國の微衷びちゆうを效いたさんと欲し、一氣に本文を綴りな作した。

予は昨年來屢しばしばば既知、未知の諸君より、三個の質問を受けた。第一、我が皇國は何故に米英と戦うて勝ち抜かねばならぬか。第二、果して我れに如何なる必勝の基本があるか。第三、如何にして勝ち抜くことが出来るか。本文は即ち以上の三問に對する返答である。或は語つて審つひらかならざるところがあり、説いて詳くはしからざるところがあるも、其の大意は明白ならむと信ずる。

×

×

×

世間では往々他人の言葉尻を捉へ、若しくは揚足を捕り、色々著者の本意を歪曲し、強ひて毛を吹いて疵を求めんとするが如き者が皆無ではない。著者の言ふところは粗枝大葉、百創千孔あるを知る。然も其の大意は虚心平氣に通讀するの君子は、必らずこれを諒解するに難くはあるまい。予の著書の目的も、書中に陳べたる如く、ただ敵に勝たんが爲めの一意に他ならない。即ちこの眇たる一冊も、皇軍必勝の爲めに一毛にても寄與するところあらば、著者の本懐である。

投レ卷從レ軍各競レ先
青春許レ國氣衝レ天
慚將ニ衰朽ニ落ニ人後ニ
七十年前一少年

昭和十八年十一月念九

蘇峰 徳富猪一郎

目次

序

序 説……………一

第一篇 超 非 常 時……………一

第二 三種の戦争観……………六

第三 人類の移動……………九

第四 世界史上の一大奇蹟……………一三

第五 尊皇攘夷(一)……………一八

第六 尊皇攘夷(二)……………二三

第七 尊皇攘夷(三)……………二九

第一篇 何故に必勝せねばならぬか(必勝の必須)……………三三

第一 利害の戦争と生死の戦争……………三三

第二	妥協なき戦争	三六
第三	戦争原因の歴史的観察(一)	四〇
第四	戦争原因の歴史的観察(二)	四七
第五	戦争原因の歴史的観察(三)	五一
第六	米英の對日憎悪と戦後方針(一)	五六
第七	米英の對日憎悪と戦後方針(二)	六一
第八	大東亞興亡の責任	六四
第二篇 何故に我等は必勝するか(必勝の基本)		
第一	大義名分の戦争と不正不義の戦争	六九
第二	大西洋憲章の解剖	七三
第三	不可解なる米英の戦争目的	七九
第四	統帥と戦闘區域	八三
第五	勢力集中と勢力分散	八七

第六	三脚競走	八九
第七	莫迦の天國	九六
第八	物的要素	一〇〇
第九	人的要素	一〇四
第十	靈的要素	一〇九
第三篇 如何にして我等は必勝するか(必勝の方策)		
第一	必勝の信念	一一三
第二	割據主義の打破	一二六
第三	ユダヤ根性を去れ	一二三
第四	増産の敵	一二五
第五	短期戦と長期戦(一)	一二九
第六	短期戦と長期戦(二)	一三三
第七	教育の根本義	一三六

第八	國民精神の淨化	一三九
第九	人的資源と人口増殖	一四一
第十	自力本願	一四四
第十一	ルーズヴェルトとチャーチル(一)	一四六
第十二	ルーズヴェルトとチャーチル(二)	一四八
第十三	ルーズヴェルトとチャーチル(三)	一五三
第十四	ルーズヴェルトとチャーチル(四)	一五六
第十五	敗北思想	一六〇
第十六	神經戰	一六二
第十七	思想戰	一六五
第十八	自由主義の一掃	一六九
第十九	和を以て貴しと爲す	一七一
結語		一七五

第一	アジアは一なり	一七五
第二	東亞思想の根本義	一七八
附録・註釋		一八二

序 説

第一 超 非 常 時

世間で非常時ひじやうじと云ふが、其實を語れば今日は超非常時てうひじやうじである。三千年來日本の對外關係たいぐわいけんけいに於て最大の非常時は、文永、弘安の蒙古襲來もうこしふらいであつた。然もそれは單だ朝鮮、對馬、壹岐いさきを経由し、また支那江南より我が五島、平戸の方位ほうみを目指し、我が筑紫つくしの海に來寇らいこうしたるに止まつた。されば其の戦場は、北九州の一部と其の周邊しうへんの群島に過ぎなかつた。然るに即今そくこんの米英撃滅大戦けきめつたいせんは其の戦線一萬軒いちまんけんに亘り、然も動もすれば彼は戦争以前せんそういぜんABC Dの包圍陣ほうゐじんを以て、我れを袋叩きにせんとした舊態きうたいに復せんとしつゝある。

國史上の最大非常時
時は蒙古襲來

ABC Dの包圍陣

x

x

x

維新以來の我が戦争

従来の戦争には限度あり

戦争よりも決闘

戦争にも幾種の戦争がある。我が維新＊三以來の歴史に就て見ても、伏見鳥羽の役も戦争である。上野に於ける彰義隊＊四の攻撃も戦争である。會津戦争＊五、長岡戦争＊六、函館戦争＊七、引續いて佐賀の戦争＊八もあれば、明治九年に於ける熊本神風黨＊九の蜂起＊一〇も亦た戦争である。十年の役＊一〇は勿論内地に於ける戦争の最大なるものであつた。爾來＊一一二十七、八年戦役、三十七、八年戦役は何れも大戦争にして、然も三十七、八年の戦役は其の效果から云へば單に明治以後と云はず、日本開關＊一二の歴史以來最も世界の歴史に影響を及ぼしたる戦争と云はねばならぬ。然もそれでさへ限度があつた。

然るに今回の戦争は、戦争と云はんよりも寧ろ決闘＊一三と云ふ可きものである。即ち彼れ我れを殺さずんば我れ彼れを殺すといふ戦争にして、それが如何に猛激＊一四であり且つ熾烈＊一五であるかは、戦争其のものの性質に依つて之を察するに餘りがある。決闘といふ文句は、個人と個人との立合ひに用ひてゐるが、國家と國家、民族と民族との立合ひに於て此の言葉＊一六を

ローマとカルタゴとの戦争

ハンニバルの遠征

ローマ人の忍耐
スキピオの反撃

東亞をして東亞の東亞たらしむる戦争

用ひる場合は極めて少くある。強ひて其の例を世界の歴史に援けば、例へばローマ＊一七とカルタゴとの戦争がそれである。互＊一八ひに優長＊一九を争うて其の勝負を定むるぐらゐでは双方共に満足が出来ない。勝つばかりでない、勝ち抜かねばならぬ。斯＊二〇の如くにしてローマとカルタゴとの戦争は四十餘年に亘つて遂＊二一ひに彼我双方に勝敗＊二二あり、殊にカルタゴの大將ハンニバルの遠征に至つては、スペインよりアルプスを越え、坂落しにローマに迫り、殆んどイタリアの大過半を占領して駐屯すること十四年に及んだが、ローマ人が堅忍不拔＊二三、石にも嚙＊二四り附いて克＊二五く忍＊二六び克＊二七く耐へ、やがてはスキピオがカルタゴを襲＊二八ひ、ハンニバルを趨＊二九らしめ、遂＊三〇ひにカルタゴの都城を一の廢墟＊三一たらしめて然る後に已＊三二んだ。

然るに今回の戦争は寧ろそれに比してより以上の戦争である。一言にして云へば、東亞をして東亞の東亞たらしむるか、將た東亞をして米英アングロ・サクソン人種の東亞たらしむるか、此の問題を結着＊三三せざるう

アングロ・サクソンの野望放擲は虎狼の慈悲と同様期待出来ぬ

事實隱蔽は不親切

ちは決して中止することは出来ない戦争である。若し彼が自から兜を脱いで降参し、東亞全面より撤退し、且つ將來に於ける野望一切を放擲すると云はばそれまでであるが、元來強慾非道を以て其の特色とする彼等アングロ・サクソン人種に向つて斯る事を望むは、猶ほ虎狼に向つて慈悲仁愛を期待すると同様、到底話にならぬ相談である。それで我等の要求を達する唯一の手段は、ただ彼等を撃滅するより外に道は無い。然るに其の撃滅なるものも亦た決して容易の業ではない。

我等は現状を黒く描きて、我が同胞に向つて不必要の心配を掛けんとするものではない。然しながら事實を隱蔽し、我が同胞をして眼有つて見ず、耳有つて聞かず、口有つて言はざる如き待遇を與ふことは實に不親切の極と信ず。故に戦時機密に差支なき限りは、事實を事實として語るが最も正當の道と信ずる。

我國は大苦戦なるも希望ある戦ひをなしつゝあり

敵の狙ひは神經戦

其の心持を以て語れば、今日我が皇國は樂戦でもなければ安戦でもない。率直に語れば苦戦である。否な大苦戦である。然も同時に決して敗戦でもなければ無望戦でもない。極めて常識的に語れば、敵は支那を基地として我が皇國の心臟部を空襲せんと企てゝゐる。又た太平洋の島から島に、飛石傳ひに我國に肉薄せんとしてゐる。又た北方の捷路を採りて、我が鐵壁の備への聊か手薄と彼等が認むる——事實は然らざるも——方面より我れを衝かんとしてゐる。

彼等は日本人が敗戦の經驗無きことを知つてゐる。彼等は日本人が頗る多血多感にして、興奮し易く、時としては周章狼狽するが如き弱點を持つてゐると信じてゐる。故に實害を日本に及ぼすよりも、寧ろ神經戦にて日本人の戦鬪意志を攪亂し、それに依りて敗北思想を醗酵せしめんと企てゝゐる。

海上に於けるソロモン群島、ニューギニア方面、ギルバート諸島、陸上に於ける雲南よりビルマに掛けての方面、若しくは印度に接近しての方面に於て、如何に我が陸海軍が勇猛果敢に奮戦しつゝあるかは、我等が今まこゝに之を語るまでもなく、連日の新聞が之を傳へ、ラジオが之を語り、而して當局も常に我が將兵の忠勇を國民に宣示するに於て油斷が無い。而して之に依つて見ても其の大苦戦の實況が想像せらるゝ。

第二 三種の戦争観

我等は決して我が國民の愛國心に向つて疑念を挟むものではない。概言すれば一億臣民皆な君に忠にして國を愛する忠良の臣民である。此の概観の下に我等は世上に三種の人士あることを認むる。第一は樂天家である。彼等は緒戦に於て我が電撃戦の餘りに迅速敏活、且つ赫々たる大戦果を収めたるに陶醉し、敵兵與し易し、此の戦争は手に唾して勝利を博すべしと思ひ込み、今まなほ其の快夢より全く醒めざる者である。

第二は悲觀者流にして、彼等は緒戦の快夢より醒め來つて、其の戦果が手に唾して收め得ざるを見て、自から幻滅を感じ、之でも困る、あれでも困る、困る困るで其日を暮らし、日一日と前途を悲觀し、既に然りと云はざるも、動もすれば敗戦思想を醗酵せんとするの傾向が無いでもない。第三は樂觀もせず悲觀もせず、所謂無念無想、無頓着にして、彼等はただ生活の日に増し窮屈に赴くを感ずる程度に止まるものである。

x x x

以上の三者は決して日本全國民の一切を總括するものではない、たゞ其の若干の部分に於て斯る現象を認むるのみである。之を全國的に總説すれば、樂觀もせず悲觀もせず、固より無頓着でもなく、一心一向に直前勇進しつゝあるものが多數である。此の多數を擁して我が皇國は前途の光明を認め、兀々として善く戦うてゐる。殊に此際我等をして愉快

に堪へざらしむるは青年學徒の奮起である。

x x x

我等は少くとも明治十年以後のことはよく心得てゐる。明治十年の亂には九州の青年にして西郷に味方したる者は相當にあつた。而して明治二十七、八年役に於ても、更らにより大なる三十七、八年役に於ても、未だ曾て今日の如く全國的に我が青年學徒の奮起作興をしたることはない。從來は親が子を率ゐ、兄が弟を率ゐ、教師が生徒を率ゐ、母が娘を率ゐ、姉が妹を率ゐ、知識階級が一般大衆を率ゐ、資本階級が勞務者を率ゐるが例であつた。然るに今日はそれが全くとは云はぬが殆んど顛倒してゐる。今日は弟が兄を起し、子が親を起し、生徒が教師を起し、大衆が知識階級を起し、勞務者が資本家を起す、而して國民が當局者を起すといふが如き形勢を馴致し來つた。所謂疾風勁草を知る、今日我が皇國が此の大難關に逢着して、始めて我が皇國の皇民が其の必然の本色を發揮し來つた。若し痛快と云はば我等は未だ曾て之ほど痛快なることを經驗

した例が無い。

x x x

本文の著者は當初より米英擊滅論者であつた。之を誇張するでもなく、之を取消すのでもなく、事實が全く其通りである。而して當初より其の必勝を確信したるものであり、今まなほ之を確信してゐる。思ふに今日に於て我が一億同胞の中には、何故に戰爭に勝抜かねばならぬか、何を以て必勝の信念は存在するか、如何にして必勝すべきか。以上の三問題に就て考慮する人士が少くあるまいと思ふ。我等は當初より米英擊滅論者として、此の三問題に就て我が同胞に向つて解説を呈すべき義務の存在することを覺悟し、以下に於て聊か意見を開陳し、一億同胞に訴へんとす。

第三 人類の移動

世界人類の起原に就ては、^{*二}ダーウインの「種の起原」若しくは「人類

「遺傳論」に依つて科學的説明の端緒を開いたが、然も我等は斯る問題に觸るゝ必要はない。たゞ人類有つて以來、人類は決して一所に定住せず、必ずしも風の如く、潮汐の如く、定期的に移動せざるも、其の必要に應じて常に移動して止まざるものである。或る意味に於て世界の歴史は人類が地上移動の記録と云うても差支ない。

其の移動は概ね食を求めて動くのである。食と云へば衣と住とも其中に含まれてゐる。其點に於ては人間のみでなく、魚類でも、鳥類でも、獸類でも皆な同様である。食に就ては原始の人間も現代の人間も、其の必要を感じる程度は同一である。但だ現代人は凡有る補給の手段方法を持つてゐるから、原始人ほど衣食に窮することが少く、其爲め衣食の缺乏の爲めに急激なる移動を來たすことも少い。けれども原始人に於ては天災、地變、飢饉、疫癘等は勿論、一地方に於て食糧を漁り盡くせば概ね他地方に向つて動く。一波動いて萬波之に隨ひ、一人動いて萬人亦

た動く、即ち先に行く者は後から押され、後に行く者は又た其後から押される。それで最初に動きたる者は、自から行き着く方向を指定するの違なく、背後の壓力に餘儀なくせられて意外なる方面にまで突出するところがある。

人類の移動に就ては自から自然の方向がある。それは寒地より暖地向ひ、山地より平地に向ひ、瘠土より沃土に向ふが自然の原則である。随つて北より南下する者は多くて南より北上する者は少い。又た人口の移動は必ずしも南北に限らず、東西に移動することもある。之は必ずしも西より東と限らず、東より西と限らず、或時には西方の民族が東方に向つて動き、或時には東方の民族が西方に向つて動くことがある。それには種々の理由があるが、何れも其の移動の動機の一つと云はざるも、第一は生活の便宜を求めて然るものである。

地球は世界の國家
民族の墳墓
河を基本とする文
化

海洋を基本とせる
國家
大陸を基本とせる
國

宗教に因る移動
冒險に因る移動
追利に因る移動
囚徒移住による移
動

日本國の存在は一

又た移動には自から自然の道筋がある。其の道筋は或は大なる川流に沿うて下り若しくは遡り、或は大なる山脈に挟まれたる溪谷を縫うて下り若しくは上り、或は潮流の方向に従ひ、或は風位の變化に隨ふ。即ち我が日本の如きは常に黒潮の流れと貿易風の變化とに依つて、他との交通を支配せられてゐることは、今猶ほ古への如く、古へ亦た今の如くである。斯くて或者は生活に大なる便宜の地を見出し、其處に永住し、而して其の人口が増殖し力が餘れば更らに他に向つて膨脹し、其の膨脹の力が更らに他に及ぼして、宛も石を池中に投じ、其の波紋を生ずるが如く、其の池端に到らざれば止まない。斯の如くにして民族が出来、國家が出来、従つて其の國家の盛衰興廢が出来て來たる。故に或る意味から云へば地球は世界の民族、凡有る國家の墳墓と云うても差支ない。ニール河に於けるエジプト。チグリス、ユーフラテスに於けるバビロン、アツシリヤ。インダス河畔に於ける印度。黄河畔に於ける五帝三皇の文化。揚子江流域に於ける漢以後の文化の如き、皆な河を基本として出で

來たりたるものである。ギリシヤ、ローマの如きは海洋を基本として成長し、成吉思汗、チムールの如きは大陸を基本として活動し、皆な何れも其の手近き場所より足を踏み出してゐる。若し夫れ南北アメリカ、アフリカ大陸、濠洲等の如きは何れも近世的人口移動の顯著なる適例にして、其の移動の原因に就ては或は宗教上の迫害を避くる爲めでもあり、或は冒險的に斬取り強盜を爲さんとする爲めでもあり、或は金を掘らんが爲めに、或はダイヤモンドを獲んが爲めに、或は大なる牧場を求めんが爲めに、或は大なる農場を築かんが爲めに、時としては泥棒とか放火者とか凡有る囚徒を移住せしめたることもある。其の強制と自動とに拘はらず、何れも生活の便宜が其の根本動機であることは原始人の移動と何等異なるところがない。

第四 世界史上の一大奇蹟

斯の如く變化極まりなき世界の歴史に於て、日本國の存在は實に一の

の奇蹟

内容變化せる諸外國

支那の變化

三千年來變らざる日本

奇蹟と云はねばならぬ。それは何故かと云へば、有史以來日本國は依然たる日本國である。世界各國の中今猶ほ古來の名目を存續してゐるものもある。然もそれは地理上の名目に止まつて、其の内容は或は全く同じからざるものもあり、或は殆んど同じからざるものもあり、即ち最も同じきものと稱しても非常なる變化がある。支那に於ても孔子時代の支那と、今日の支那とは、等しく支那であるが其の主權者の變化も殆んど三十朝を數へ、其の人種も黄河の局部に限られたる周の時代と今日とは全く趣きを異にしてゐる。即ち世界中に於て最も保守性に饒み、最も永續性に富んだと稱する支那にして猶ほ斯の如く、其他に於てはたゞ古代の文化は博物館や、若しくは寒煙蔓草、斷礎殘石の間に其の髣髴を認むるに過ぎない。

然るに此の慌だしき變化の間に於て、日本のみは三千年來、今なほ古への如く、古へなほ今の如く、萬世一系の天皇統治の下に、大和民族は

一大有意義の事相

日本國は天神によつて肇造せらる

神勅に宣べられたる我が國體の根本義

茲に皇室を中心として生活を續けてゐる。之をしも奇蹟と云はねば何を奇蹟といふことが出來よう。我等は嘗だに奇蹟と云ふばかりでなく、之は世界の人類史上に於ける一大有意義の事相たるを認識せねばならぬ。

日本人種が何れの方向より如何にして日本に來たりたるか、若しくは本來日本に永住したるか。それ等の問題は他に研究者がある。我等はただ日本の正史である日本書紀の神代卷に依つて、我が日本國は天神に依つて肇造せられたるものと信じ、其の以前に遡ることは専門の研究者に譲る。肇國以來の歴史に就て之を觀察すれば、我等の旨趣は足る。即ちたゞ我國の正史たる日本書紀に掲げられたる「豊葦原ノ千五百秋ノ瑞穂國ハ是レ吾ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ。宜シク爾皇孫就キテ治セ。行矣。寶祚ノ隆エマサムコト當ニ天壤ト窮リナカルベシ」の神勅を奉戴すれば、我等の我が國體に關する觀念の根本義は足る。

孔子は陶虞三代の美を稱し、それをプラトンの所謂「理想國」同様の觀をなしてゐる、後世の學者も亦た堯が舜に譲り、舜が禹に譲りたるを見て、人君美德の極致と稱してゐる者もあるが、之は單だ楯の一方を見たるのみにて、韓非などでは三代の治もなか／＼左様な生ま易しきものではなく、頗る殺伐であつて、堯舜の間にも、舜禹の間にも、又た禹と益との間にも凡有る權力争闘があつたと記してゐる。然しそれらの穿鑿は何れにしても差支ないが、支那の如きは湯武放伐さへも、孔子の道を祖述すと稱する孟子に於ては辯護せねばならぬ程の必要があつた。

然るに我國に於ては天照大神の神勅は、萬世不磨の聖典として奉戴遵行せられてゐる。然かのみならず我國に於ては、一寸の土地をも他より奪はれたることなく、大和民族が其の幹部となり、皇室を中心として大八洲を護り、皇徳に依つて歸化したる外來の人種を融合し、今日に於ては全く其の融合の極致に達し、如何なる人類學者でも日本國中を遊歴して容易に其の差別を爲す能はざるまでに至つた。

て容易に其の差別を爲す能はざるまでに至つた。

日本は天皇のしろしめす國土なれば、之を皇國と稱するは當然であり、人民は天皇の臣民として、祖先以來繼續し來りたるものであれば皇民と稱するは當然である。同時に天皇は現身神に在はし、現身神のしろしめす國であれば神國と云ふべく、又た神國に居住する我等は神民と稱するも、決して不遜ではあるまい。

斯の如く日本が變化極まりなき世界年代の大波瀾の中に在つて、恰も大洋の中に於ける大いなる巖石の如く、巍然として動かす、一の國家とし、一の民族として存在するは、まさに是れ日本自國の爲めに存在するばかりでなく、世界二十億の人類の爲めに存在するものと云ふも過言ではあるまい。即ち日本國は國家として世界の儀表であり、模範であり、標準であり、又た日本國民は其の儀表であり、模範であり、標準である

國家を支持するところの國民であれば、また世界の凡有る國民に對する儀表的、模範的、標準的國民と云はねばならぬ。従つて我等國民は單に日本の國家を擁護するばかりでなく、世界の師表となり世界を善導すべき重大の責任あることを銘記せねばならぬ。

斯る次第であれば我等に大切なるはただ此の皇國と皇民との自覺である。日本國の前途はたゞ此の皇國、皇民の自覺如何に依つて之を卜することが出来る。苟くも我が皇民にして、極天皇基を護るといふ三千年來の臣道を遵奉實踐するに於ては、平和の時も戦争の時も、安樂の時も、艱難の時も、如何なる場合に於ても日本國の運命は萬々歳である。即ち今日の難關を突破するに於て何かあらんやである。

第五 尊 皇 攘 夷 (一)

我等は我が同胞に向つて歴史家たれと云ふではない。けれども日本歴

史の大綱だけは心得て貰ひたい。殊に明治末期より大正初期に生まれたる現代の中堅とも云ふべき人士に向つては、嘉永、安政以來維新回天の歴史の大筋だけは心得て貰ひたい。日本の歴史は皇室中心の歴史である。皇室を離れては日本が無い。日本が無ければ日本歴史のあるべき筈はない。日本の歴史は皇室を以て始まり、皇室と共に榮え、皇室と共に生々息まざる歴史である。凡そ有史以後に於て、即ち神武天皇以後に於て、日本の凡有る運動は皇室を中心として出で來つてゐる。又た皇室に依つて出で來つてゐる。神武天皇の東征を以て始まりたる我が歴史は、明治天皇の維新中興の歴史に至るまで大道直くして髮の如く、總べて皇室に依つて一貫してゐる。此の大筋さへ心得てゐれば、餘は刃を迎へて解くべきものであり、又た自然に解くることとなる。

更らに癸丑甲寅以來の回天史に就て考察を下ださんに、此時に及んで始めて久しき間即ち鎌倉幕府より室町幕府、戰國時代を經、江戸幕府に

六百年の迷夢

皇國皇民の自覺が
尊皇攘夷となる

至るまで、半ば日本國民が其の皇國たるを忘れ、其の皇民たるを忘れ、若しくは忘れんとしつゝあるに際し、猛然として六百餘年來の迷夢は覺め來たつた。即ち始めてこゝに日本は皇國であり、我等は皇民であることの自覺が蘇へり來たつた。而して其の自覺の徵象が即ち尊皇攘夷である。尊皇とは日本は天皇のしろしめす國であれば、萬機天皇の御親政に復せねばならぬといふことが即ちそれであり。日本は天皇の國であるからして外國人が之に一指だも染むることを許さぬといふのが即ち攘夷である。斯の如くにして尊皇と攘夷とは互ひに相ひ表裏し、互ひに相ひ援助し、互ひに相ひ戮協し、遂ひに維新回天の事業を成就したのである。而して因となり果となり、果となり因となつて其の自覺は明治の御代を過ぎ、大正の御代を経、昭和の御代に至つて愈々旺盛であり、且つ旺盛であらねばならぬ。

北方の妖魔

近世の國史に於て、皇國を脅威したる妖魔は北方から現はれ來たつ

西方の妖魔

阿片戦争

東方の妖魔

た。それは云ふまでもなく露國の脅威である。即ち寛政文化の間に於ける赤狄の來寇である。これが爲めに我國の識者は屢ば夢魘に罹り、殆んど安眠することを得なかつた。然るに天保以來更らに妖魔は西方より現はれた。それは即ちイギリス勢力の東漸である。イギリスが阿片を支那に押賣りし、その阿片を焚きたりとして直ちに無法にも支那政府に向つて戦ひを始め、香港を割取し、五個所の港市を開かしめ、二千幾百萬の償金を拂はしめたる一事は、我國に極めて重大なる影響を及ぼした。然かのみならず我國の識者中にもイギリスの印度に於ける攻略の大いなる實物教育を示され、何れの日か此の魔力と接觸するの時あるを豫期して、憂慮に堪へなかつた者がある。而してやがては又た東より一の妖魔が出現來たつた。それが即ち米國の來寇である。元來英と米とは同根より生じたるものであつて、英國の人種が米國に渡り、其の米國人が更らに米大陸を征服し、太平洋沿岸に出で、やがては太平洋に捕鯨船を乗り廻し、我が日本の沿岸までも接近し、斯の如くにして又たこゝに太平洋航路は

米國來寇の徑路

開け、從來米國より大西洋を經、印度洋を迂回して支那貿易を營みたる者が、太平洋を横斷して直ちに支那に向ふ捷路を探ることになり、其爲め日本を其の足溜りとなす必要を感じ、彼れや是れやで遂ひに米國の船が英國よりも一足先きに日本を見舞ふこととなつた。それと同時に露國の船も亦た來たつた。云うて見ればアングロ・サクソンは本家、新家の二た手に分れ、一は西から印度を經、海峽植民地を經、支那を經て日本に來たり、他は太平洋を一直線に日本に來たのである。

第六 尊皇攘夷(二)

西力東漸は我が戰國時代の末期、ホルトガル、スペインの來寇より始まつた。然るに信長、秀吉、家康三人は、銘々其の手段を異にしてゐたが、其の目的は彼等を驅使することあるも決して彼等より驅使せらるることなく、彼等を利用することあるも決して彼等より利用せらるることなく。而して若しひと度彼等が猥りに我儘勝手の振舞ひを逞しうせんと

する時は、忽ち鐵腕を擧げて之を打撃し、遂ひに其の極島原耶蘇の亂となり、鎖國令は布かるゝこととなつた。然るに北に於ける露國の東漸勢力と、西に於ける英國の東漸勢力とは、一は北より我れを脅かし、一は西より我れを脅かし、而して英國の新家たる米國は更らに東より我れを脅かし來たつたのである。此時に際し我國識者の間には、此の英露二大敵に對して、如何に措置すべきかといふ問題が屢ば考慮せられた。米國は英國の支流であつて、當時は英國といへば米國も亦た其中に含まれるものとして考へられ、若し然らざれば殆んどそれ程重大のものとして計上せられなかつた。

英國の手が支那に延びざる以前には、日本ではただ露國のみを憂ひとした。而して如何にして露國の禍ひを防ぐべきかといふことに就てはそれ〴〵議論もあつた。中には長い物には捲かれよ、とても今ま開戦したとて露國に勝つ見込はないから、暫く辛抱して彼れと妥協し、我が國力

を養うて後、始めて我が思ふところを遂ぐべしといふ論を主張したのが有名なる和蘭學者杉田玄白であつた。天保時代になつては我國の識者は寧ろ英國を以て正面の敵と心得てゐた。英國の船が常陸の天津港附近に碇泊した時に、藤田幽谷は其の一子東湖に速かに現地へ赴いて、先づ日本刀にて彼れを斬れと命じ、東湖は慨然之に赴いたが既に英船は去つた後であつた。東湖の詩に「絶海連橋 十萬兵 雄心落落壓三湖城 三更夢覺幽窓下。唯有風聲似雨聲」と云ふは、イギリスを攻むるの夢を見て作つたものである。

又た橋本景岳の如きも、日本の世界に於ける位置を考察し、英露兩國を同時に敵とすることは決して得策に非ず、寧ろ露と結んで英を討たんに如かずといふ、即ち日露同盟討英論を唱へた。其の理由は、露國は老大ではあるが何處やら呑氣なところがある。英國に至つては老獺、狡猾、煮ても焼いても喰はれるものではない。そこで先づ露と結んで英に當る

に如かずといふ意味である。此の意見は明治年間にも相當有力にして、伊藤公の如きも殆んど最後まで日露同盟論者であり、即ち明治三十五年、日英同盟の締結せらるゝ其の刹那まで、日露同盟の爲めに努力するところがあつた。

要するに日本人はアングロ・サクソン人の爲めに挟み打ちとなつた。米國が英國に先んじて日本に來たが、事實は米國は英國の爲めに露拂ひを爲すに過ぎなかつた。米人が努力して開港したる貿易の利は、殆んど其の大部分を本家の英人のために占められた。それと同時に米國の開港の目的も亦た米人の獨力で成就したものでなくして、英人の息のかゝつた爲めに出來上つたのである。即ち英人が印度に於て、支那に於て、日本人に凡有る實物教育を興へたる結果、米人は容易く其の目的を達することが出來た。安政條約の如きも、ハリスが岩瀬肥後守、井上信濃守などに向つて、「今ま此の條約に調印しなければ、近く英人が來たつて如

何なる無理難題を申し掛くるかも知れぬ。若し此の條約に調印さへすれば、これ以上の注文は英人たりとも附くることは出来まい。英人が來ぬ前に早く調印するが日本に取つて得策である」と、かゝる文句で日本人を口説き落し、遂ひに調印させたものであるからして、云はばハリスは英人の禪ふんどしにて角力を取つたものと云つても差支ない。維新の目的は尊皇攘夷であつた。薩長土肥が維新回天事業の功勞者であり、殊に薩長二藩が殊勳者であるといふ理由で、相當專横せんわうの振舞ひを爲したことは眼を鎖とざすことは出来ぬが、さりとして天皇御親政の大目的は天日の天に麗かるが如く明々白々となつた。即ち尊皇の目的は大體に於て達せられたと云うても差支ない。

然るに攘夷に至つては、攘夷をたゞ文句通りに實行したる爲めに、維新當座はしきりに外人と衝突し、中には外人を斬り殺したる者があり、其爲めに當時の新政府は外人より突込まれ頗る當惑したが、さりとしてこ

x

x

x

れは日本人の罪ではなく、其の十中の七八までは外人が不法無禮の振舞ふるまひを爲し、自から求めて其の葛藤かつとうを惹き起したのに相違ない。然も之に當惑したる新政府は、義あつものに懲りて膾なますを吹き、外人に對する特別なる保護を加へたが、これは我が國民の眼には外人を日本國民以上の珍客として優遇するものと心得しめ、その爲めにさなきだに徳川末期より起りつゝあつた外人崇拜熱すうはいねつが更らに加速度を以て増上し來たつた。然かのみならず外國に對立するには先づ外國を學ばねばならぬといふ誤りたる原則の下に、我れの短を捨て彼れの長を採るといふばかりでなく、我れは我が長短一切を捨て、同時に彼れの長短一切を呑込むこととなり、出來得べくんば白粉を塗つてでも白哲人種はくせきの眞似まねを爲さんと欲するに至り、眼玉に青き硝子玉がらすだまをはめても西洋人の風に摸せんと欲するに至つた。然しながら日本人は何處までも日本人である。外面には然ることを爲しつゝも、其の精神はなほ日本人である。一方には西洋崇拜の熱が殆んど日本人を熱殺するまで熾さかんであつたが、然しそれ等の人々さへもいざとなれば

アングロ・サクソンの對日文化征服
米英等諸國を精神的祖國視す

ば日本人たることを忘れなかつた。さればアングロ・サクソン人も從來威力を以て臨みたる慣用手段を以て、他の亞細亞人同様日本人に臨むことは到底不可能であるといふことに氣が付き、それで彼等は所謂文化的滲透、文化的征服を試みるに至つた。即ち剛克く柔を制するでなくして柔克く剛を制するのである。明治初年より昭和の初期まで殆んど七十年、其間はその手段方法は一ならざるも、アングロ・サクソン人の日本に於ける文化的征服史である。即ち此の征服に罹りたる者は、心からアングロ・サクソンを以て精神的祖國と認むるに至り、日本の皇國たることを忘れ、日本國民の皇民たることを忘れ、否な自から皇民たることを恥づるかの如きあさましき心さへ持つに至つた。而して凡有る學校、凡有る書籍、凡有る文化の事業より、延いて生活一般に至るまで、殆んどアングロ・サクソンの出店であり、仲買ひであり、小賣りであるかの如き觀を呈するに至つた。

第七 尊皇攘夷(二)

日本の自力發揮せらる

斯の如き精神的麻痺病に罹りたる日本が、なほ明治二十七年、八年には「ホ三五萬里の波濤を拓開し國家を富嶽の安きに置く」維新皇謨の精神を奉持して、大陸の一大國と太刀討ちを爲し、更らに三十七、八年には、百年前までは夢にさへ魔はれたる露國に立向ひ、遂ひに勝利を博したるは、意外と云へば意外であるが、其實は決して意外ではない。三千年來祖宗の恩澤に依つて養成し來たつたる日本の自力は、こゝに漸く其の眞面目を發揮し來たつたのだ。

× × ×

日露役は東亞勃興史の分水嶺

明治三十七、八年役は日本が世界に向つての一大抗議であつた。此爲めに東亞の民族は期せずして皆な慨然日本の風を見て起たんとした。若し世界史に於て東亞勃興史を編する者あらば、三十七、八年役を以て其の分水嶺とせねばならぬ。然るにそれにも拘らず、日本はなほアングロ・

サクソン崇拝に囚はれて、自から新天地を發見するに違あなかつた。日本人がアングロ・サクソン崇拝の迷夢より覺め始めたのは、要するに昭和六年九月十八日、柳條湖事件以來、即ち滿洲事變以後である。若し日本の歴史に皇國的自覺、皇民的自覺の具體的な發露を探ねんとせば、我等は此の時期を指點せねばならぬ。

滿洲事變より支那事變、續いて大東亞戦争に至る間のことは、我等が近く目撃耳聞したることなれば、今まこゝに繰返す必要は無い。但だこゝに特筆せねばならぬことは、日本は東亞に於て實にアングロ・サクソン東漸勢力の防波堤となつたことである。若し東亞に日本が無かつたらば、東亞を擧げてアングロ・サクソンの植民地となつたことは必然である。蒋介石の如きは自からアングロ・サクソンに依存して、日本を以て支那當面の敵と呼ばはつてゐるが、若し日本が無かつたならば支那は既に全く政治的には無意味であつて、たゞ地誌上の名目として存したかも

知れない。重慶政府が歐米に依存しつゝ、今まなほ餘喘 保ちつゝあるのも、畢竟するに日本あつたが爲めである。即ち彼等の存在さへも、日本が東亞に於けるアングロ・サクソン勢力の防波堤となり、更らに防波堤たるに止まらず、アングロ・サクソン驅逐の原動勢力となつたが爲めであると云はねばならぬ。

世界の歴史は必らずしも西力東漸のみではない。東方の勢力が西漸したることも決して珍しきことではない。コンスタンチノールを落城せしめ、ビザンチン帝國を亡滅せしめ、其の存続したるギリシャ、ローマの文化と、其の學術、技藝を歐洲に復歸撒布せしめたるも、畢竟トルコ人の力である。又た今日に於けるまでスペインに於ける回教文化の痕跡を見れば、如何にアラビアの勢力が北阿、南歐に繁殖したるかを知らぬに餘りがあらう。更らに成吉思汗の雪崩れを打つて歐洲に攻め入り、今日に至るまで鞑靼の痕跡がなほ蘇聯の一部に保存されつゝあるを見ても、

西力東漸は東亞民族の薄弱に因る

大東亞戦の一大義戦たる所以

又たチムールの勢力が歐洲に波及し、殆んど歐洲を震撼せしめたる如きも、是れ皆な東力西漸の事實である。されば獨り西力東漸のみが世界歴史の唯一の潮流と認むべきものではない。水は低きに就き、火は高きに騰る。運動は最も抵抗少き所に向ふ。畢竟西力東漸は東亞諸民族が自ら薄弱にして、己れの領域を擁護する能はざるが爲めと云はねばならぬ。即ち大東亞戦争の如きは、其の長く久しきに亘りたる東亞の疾苦を、東亞の力に依つて回復せんとするものにして、之を天理人道に質しても、この戦争や我れに於て當然過ぎる當然の道理を具備してゐる。所謂大東亞戦争は、世界人類の歴史に於て唯一とは云はぬが、極めて顯著なる一大義戦である。而して我が國史の上より觀察すれば、尊皇攘夷運動の一大發展、一大擴充、一大推拓である。

第一篇 何故に必勝せねばなら

ぬか（必勝の必須）

第一 利害の戦争と生死の戦争

戦争は勝つ爲めの戦争である。今更ら何故に勝ち抜かねばならぬかなどといふ問題を言ひ出す必要はあるまい。これも尤もなる申し分だ。然し大東亞戦争は尋常一様の戦争ではない。相手に取つては利害損得の戦争であるが、我れに取つては生死存亡の戦争である。此の戦争は三千年の歴史を背負つて、世界唯一の國體を誇りとする我が皇國日本の一大運命を決すべき戦争である。苟くも敗くるに於ては、我が皇國は古へのギリシヤの如く、ローマの如く、其他凡有る歴史上に其名を留めて其實を

皇國日本の運命を決すべき戦争

戦争爆發の原因

遺さざる國と同様の運命を辿らねばならぬ。即ち此の戦争は皇國日本が生存する爲めの戦争である。亡滅せざるための戦争である。生々發展する爲めの戦争である。斯る理由に依つて我等は是非とも勝ち抜かねばならぬ。

如上の理由を明白にする爲めには、我等は戦争の原因に溯らねばならぬ。何故に此の戦争は爆發したるか。此の戦争は我れより好んで喧嘩を米英に吹掛けたのではない。我國は百年來の行懸りよりして、米英を味方と考へてゐた。殊に米國に對しては殆んど親類同様の好意を表してゐた。我れより喧嘩を仕掛くる筈もなく、又た彼れより喧嘩を仕掛くるものとも考へたこともない。如何に我々が彼等の好意を信賴したるか。近衛内閣の時に政府が主動者となりて、宗教家なり、實業家なり、學者なり、凡そ米國に爪の垢ほどの縁がある者は殆んど男も女も、老人も若者も、有らん限りの人々を探し出だし、親善使節として之を遣つた

親善使節の派遣

のではないか。中にはルーズヴェルトと同級の誼みあるなどといふ縁故で、わざわざ出掛け、若しくは出掛けしめたる人もあつた。愈よせつば詰つた場合に近づいてさへも、我等は斯くまでに彼等を信用若しくは信賴した。されば此の戦争を日本が好んで挑發したなどといふことは、世界二十億の人を擧げて、誰しも斯く邪推する者はあるまい。若し邪推する者があつたとすれば、それは相手の米英兩國の外はあるまい。然も彼等は自から欺いてゐたものだ。

自から欺く米英

野村大使と來栖大使

特に開戦當時の我が大使としてワシントンに滞在したる野村大使は、海軍大將ではあるが、本來極めて平和的の紳士にして、頗る米國に對しては好意を表し、日米親善が日本に取つては勿論、米國に於ても最も賢明の策であることを確信し、其爲めに當時の松岡外相に口説かれたといへ、自からも亦た一役買つて出たのである。愈よせつば詰つた時に出掛けた來栖大使も亦た野村大使と同一の平和愛好的紳士にして、云はば

x x x

最後に於ける鳩の使として出掛けたのである。然るに此の兩大使をして愈よ匙を投げしむるに至つたのは國務長官ハルであり、又た其の背後のルーズヴェルト其人であつた。彼等は我が凡有る交譲妥協を眼にもくれないやが上にもものし掛り、遂ひに我れをして餘儀なく立たしむるに至つたのである。其の顛末は開戦の當時發表したる外務省の覺書にも明白である。

第二 妥協なき戦争

我々は今まこゝに日米交渉の歴史を語る必要はない。但だ如何に米國が我れに向つて注文したるかを明らかにすれば明白である。彼等は日本に向つて一切の手をアジア大陸より引かしむることを要求した。彼等は日本に向つて日獨伊三國同盟條約を拋棄せしむべく要求した。彼等はアジア大陸をアングロ・サクソンの植民地たらしむべき凡有る便宜を壟斷せんことを要求した。一言にして云へば、日本を全く鎖詰にせんことを

米國の我に對する
注文

日本を鎖詰にせん

ことを要求

宣戰の大詔に宣示
せられたる開戦理
由

要求した。事こゝに至れば、日本は自から起つて自家の運命を推開くの外はない。喧嘩は彼等より吹掛けられたのである。戦争は彼等より挑發せられたのである。然も其の戦争は名譽とか、體面とか、利益とか、損耗とかいふ問題ではない、我が皇國日本に取つて生死存亡の問題である。

以上の理由は、畏れながら宣戰の大詔に、日を見るが如く明らかに宣示あらせられ給うてゐる。即ち

米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レ
テ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス 剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於
テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戦シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ
與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府
ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼
ハ毫モ交譲ノ精神ナク 徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ
益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシムトス 斯ノ如ク

ニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
所謂大詔に「自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ」と仰せられたる一節が開戦の理由である。即ち此の戦争は自存自衛の戦争である。

新提案に示された
我が交譲の誠意

斯る次第であるから如何なる艱難に遭遇するも、之を克服して勝ち抜かねばならぬことは多言を俟たない。若し妥協の餘地があつたとしたならば、開戦以前に其の機會は山ほどあつた。我れは彼れに對し、出來得る限りの辛抱をなした。即ち昭和十六年十一月廿日の我が新提案を見ても、我れは如何に平和に熱心であつたかがわかる。第一、日米兩國は佛印以外の南東亞細亞及び南太平洋地域に武力的進出を行はざることを確約し、第二は蘭領印度に於て物資の獲得を保障するやう互ひに協力し、

米英我が提案を無
視す

眞珠灣襲撃は不意
打に非ず

第三は日米兩國の通商關係を資金凍結前の状態に復歸し、第四は米國政府は日支兩國の和平に關する努力に支障を與ふるが如き、即ち蔣介石を指駭して猥りに日本に抵抗せしむる如きことをせざること、第五に日本政府は日支間の平和成立し又た太平洋地域に於ける公正なる平和確立する上は、現在派遣してゐる佛領印度支那に於ける日本軍隊の撤退を約することさへ言明し、更らに本諒解成立する時は現在南部佛領印度支那に駐屯中の日本軍を北部佛領印度支那に移駐するの用意ありとまでも云つてゐる。然るに彼等はこれに一睥だも與へず、直ちに日本がアングロ・サクソンより東亞の一隅に鑑詰せらるゝことを甘諾するに非ざればやまな

日の覺書を出したる際には、既にハワイに在る米國東洋艦隊司令長官等には開戦準備の訓令を與へてゐる。従つて眞珠灣襲撃は我れの不意打ではなく彼れの油斷であつたことは、米國に於ける査問會で明白である。斯る事態の下に開戦せられたる戦争であれば、苟くも本來の目的を達す

るに非ざれば、それが如何に大いなる犠牲を拂ふも、幾許の年月繼續するも、斷じて中止すべきものに非ざることは明白である。要するに此の戦争には妥協の餘地はない。我れが勝つか、彼れが勝つか、ただ二者である。云はば生きる死ぬるの決闘である。

第三 戦争原因の歴史的觀察 (一)

我等は更らに此の戦争の起因に溯つて考へねばならぬ。即ち歴史的の觀察をせねばならぬ。先づ歴史的觀察として、アングロ・サクソンの立場からこれを語らんに、英國は既に世界制覇の野心を八分通りは満足せしめてゐた。然も彼等はこれを護るには攻勢的防禦の必要を感じ、更らに其の制覇を十分若しくは十二分までも擴充せんとした。これに反し米國は世界制覇の野望の漸く五分通りを満足せしめ、殘餘の五分はこれを東亞に向つて獲得せんとした。されば米國の野心の英國のそれに比して新鮮且つ猛烈であつたことは當然だ。斯くて保守的アングロ・サク

ソンの本家たる英國は、支那を経由して日本に迫り、進取的アングロ・サクソンの一派米國は太平洋を経由して日本に迫つた。

元來アメリカの成立ちは、これを二種に分類することが出来る。第一は所謂清教徒的移住者であつて、英國に於て國教と容れず、始めは和蘭に逼れたが、其の志を逞しくするを得ず、遂ひに米國に向つて其の自由の天地を開拓せんが爲めに移住したるものだ。彼等はカルヴィン派の教説を奉じ、自由を以て其の信仰の主體と確信し、自由の爲めには何物も犠牲とするといふ者共にして、然も彼等の自由は自己の自由にして、他の自由には一切關係なく、其爲めに自己が迫害を受けることには極端の反抗を爲しつつ、他人を迫害することに於てはまた至らざる所なかつた。他の一は即ちアングロ・サクソンの本性たる海賊根性、山師根性の者共にして、冒險を好み、危険を侵し、虎穴に入つて虎兒を得んとする所謂奇利専門の移住者にして、つまり大西洋沿岸の北部には清教徒臭

米國南北に二種の
氣風成立

米國第一主義

ワシントンとジェ
ファーソン

南北戦争の真相

味の一味が移住し、南部方面には他の冒險者の一味が移住し、斯の如くにしてアメリカは自然南北兩部に於て二種類の氣風、氣質が成立した。然も北の自から善なりとして自己以外一切を排斥する氣分と、南の自から尊大に構へて他を蔑視する氣分とは、其の動機の根源は別なるも、所謂獨尊獨善の氣象に至つては自然其の揆を一にすることとなり、これがやがては發展して今日に行はるる米國第一主義の基をなした。

自由の爲めに戦うたる初代大統領ワシントンさへも奴隸の持主であつた。人は生れながら平等であるといふ原則を喝破したる、獨立檄文の起草者、三代目大統領ジェファーソンの如きも亦た然りであつた。米國南北戦争の如きも、文句は奴隸解放、非解放の論で、人道主義の爲めに戦うたといふも、要するに商業、製造を主とする北部と、農業を主とする南部との經濟上の軋轢葛藤と、それに關聯して政黨上の争鬭とが遂ひに戦争を勃發せしむるに至つたものであつて。一皮剥いて考へて見れば、

奴隸排斥戦争なども要するに英國チャールズ一世時代、圓頂黨と騎士黨との争ひを、異なりたる土地、異なりたる場面、異なりたる旗印の下に繰返したのに過ぎない。

元來アメリカ人は清教徒の子孫にせよ、冒險者の子孫にせよ、何れも彼等は原住民たるインディアンを驅逐し、又た彼等より先住したるスペイン其他南方ラテン人種を驅逐し、漸次に其の領土を擴充し來たり、遂ひに北はアラスカに至り、南はメキシコに境し、西は太平洋岸に出づるに至つた。所謂斬取り強盜は武士の習ひといふ諺があるが、彼等は本來斬取り強盜の爲めに移住し來たりたる者であつて、米國の帝國主義なるものは、必らずしも初代のルーズヴェルトが創始し、次代のルーズヴェルトが完成したるものといふ譯ではない。帝國主義と云へば始めから帝國主義である。彼等がモンロー主義を喋々したるは、南北アメリカにヨーロッパ諸強國の手が延びるのを防禦する爲めに、アメリカのこと

斬取り強盜主義の
米國人

始より帝國主義

モンロー主義の眞
意

米英の對アジア目的は異道同目的

セワールドの帝國主義的方策

はアメリカでやるからヨーロッパでは一切構うては呉れるなといふに過ぎず。即ち第一歩として南北兩大陸に彼等の手腕を逞ましようせんとするが爲めの白實に過ぎなかつた。それで愈よ手が太平洋岸に延びた曉には、更らに太平洋を我物とし、進んで東亞に迫り來たつたのは自然の數であつて、云はゞ蜘蛛がだんく其網を擴げて行つたので、やがてはモンロー主義で東亞を打ち蔽せんとした。イギリスの印度洋を経てアジアに迫りたるも、アメリカの太平洋を経てアジアに迫りたるも、恰も東海道と木曾街道とを互ひに道中したるが如く、道筋は別であるが其の目的は同一である。殊に米國南北戦争前後の政治家セワールドの如きは最も米國の帝國主義に拍車を掛けたるものである。彼れは南北戦争の熄むや、國務長官としてナポレオン三世に向つて其の軍隊をメキシコより撤退せしむることを要求し、同時にテキサスの境上に五萬の兵を進軍せしめ、遂ひにナポレオンをして其意に従はしめた。而して彼れは一八六七年にはアラスカを七百萬弗でロシアより買収した。一八五二年彼れは颺言し

太平洋の重要性

米國の帝國主義は速成に非ず

て曰く、「國家は諸海洋の帝國を支配せねばならぬ。斯る國家のみが眞實の帝國である」と。而して彼れは又た曰く「太平洋及び沿岸島嶼並びに彼岸の廣大なる地域が、世界の偉大なる將來に於て、主たる活舞臺となる場合には、米國の大西洋に關する利害は、比較的低下するであらう」と。斯の如く彼れは太平洋に最も先きに着眼したる一人である。

元來米國はメキシコとの戦争に依つて、一八四八年には其の領土は太平洋岸に達し、爾來バナマ地峽鐵道、アメリカ橫斷鐵道の開設並びに太平洋定期航路の計畫などは十九世紀の末までに悉く活現し、其の活動の一要件としてベルリ提督の日本遠征とはなつたのである。されば米國の帝國主義は必らずしも即時速成的のものでなく、實は米國其物の成立から然るべく運命附けられてゐたものと云はねばならぬ。

米國は必らずしも日本が他日自己の東亞進出を妨害する障壁となるも

日本を飛石視したる米國

のとは豫期しなかつた。米國は當初より日本を支那に於ける進出の飛石と見てゐた。其の飛石が支那進出の邪魔物とならんとは夢にも考へてゐなかつた。それで當初米國の日本に對するや、開國は世界人類の通理であり、有無相ひ通ずるは人類相互の公道である。日本獨自在鎖國をなすなどといふことは、世界人類の與に容れざる罪惡であるといふことを理由として開國せしめた。然るにそれに依つて開國したる日本が、漸次に成長し、人口は増殖し、文化は向上し、開國必然の結果として國運膨脹するに際し、事ごとにこれを妨げ、事ごとにこれを遮り、強ひて鎖國の状態に復歸せしめんとするが如きは、寔に以て我儘勝手も此に至つて笑止千萬と云はねばならぬ。然し米國は他國の立場とか、他國民の利害とか、共通の道理とかいふことを考慮する國民ではない。同根より生じたる英國に向つてさへも常に無理難題を申し掛けてゐる。況んや彼等が黄色人種と見下し、眇たる東亞の極東に位する島國民と輕蔑したる日本人に對し、如何なる無理難題を持掛けても、彼等が一切心配する氣遣ひ

米國の我儘勝手

の無いことは論を俟たない。

第四 戦争原因の歴史的觀察 (二)

日本が其の真相を英米に認められざる以前は、東亞に於て米國の對象は常に英國であつた。米國は公然ではないが陰然英國を眼の仇としてゐた。英國は又た日本を物の數ともせず、ただ輕躁浮薄の人民と考へてゐた。東亞の事情に精通すると稱せられたる、永く支那や日本に英國の代表として滞在したるサー・ハーリー・パークスの如きは、日本の前途は先づ南米共和國の類であらうと豫言した。又た世界の大勢に通じたるサー・チャールズ・デイルクの如きも、日本は如何に小賢しく振舞ふも、とても堅實強大なる支那の相手ではないとして、極めて最小限度に日本を評価した。日本に來遊した米國前大統領グラント將軍の如きも、日本に對する最大級の好意は、日本の完全なる獨立を祈るといふに止まつた。従つて明治三十三年、支那に於ける義和團事件の如きに際しては、

明治初年における米英の日本觀

パークスの豫言

デイルクの評價

グラント將軍の觀察

日本兵と最も親善であつたのは米國兵であつた。然るに明治三十七、八年役以後に至つては、全く米國の我れに對する態度は一變した。

日露戦争の當初までは、百人の中九十九人までは日本が敗けるものと豫定してゐた。それで米國の輿論なども日本に對して比較的同情があつた。然るに連戦連勝の曉に於ては、彼等の眼が始めて覺めた。これでは油斷がならぬ。彼等は其の以前から加州に於ける日本人の活動振りを見て、密かに怖れをなしてゐた。本來一毛も生せざる沙漠の地に、日本人が力を絞る、才覺を絞る、凡有る苦勞の後にこれを立派なる花園となし、野菜畠となし、葡萄園となし、實に米國に對して思ひ掛けなき一大功德を施した。其の功德に感銘せずして、彼等はこれが爲めに日本人追出しの運動を開始した。これは日露戦争よりも約十年前からのことである。然しそれはただ加州だけのことであつて、日本國其者に對しては別に惡意を表しなかつたが、愈よ日本が露國と戦うて勝つに及んで、彼

等は忽ち日本に對する態度を一變した。世間ではルーズヴェルトが好意を以て日本に味方し、その爲めにポーツマス條約は出來たといふが、其實はルーズヴェルトも若し此の儘放置せんか、日本の勢力は何處まで延長するか知れない。故に其の未だ滿洲よりシベリアに進まざる以前に、これを切止むるに如かずとし、その爲めに彼れは講和に骨を折つたものにして、講和さへ出來れば其の講和が日本に有利なると不利なるとは彼れの問ふところではなかつた。さればルーズヴェルトが此の講和會議の成立に一肩入れたとて、彼れはこれを以て日本に恩を着すべき理由も無ければ、日本が又た恩に着るべき理由もない。

ルーズヴェルトが米國帝國主義の發起者ではなくとも、少くとも其の中興開山であることは間違ひない。日露の戦争を好機として、彼れは日本の手をヒリッピンから封じた。これは米國としては大いなる獲物であつたに相違ない。然しルーズヴェルト其人は、直接南滿鐵道を請負はん

としたるハリマンの計畫とは關係はなかつた。これは寧ろ當時日本に於ける米國公使グリスカムが、ハリマンの先棒を擔いで目論んだる一芝居であつて、それが幸せにも小村外相の一喝に依つて中止せらるることになつた。然しルーズヴェルトが滿洲に對して其の野望のあつたことは、日本軍の連戦連勝を頭痛に病み、早く其の鋒先を切止めんとしたことは、わかる。ただ彼れは苟くも志を滿洲に逞しくせんとするには、少くとも英國の海軍とドイツの陸軍とを持たねばならぬといふことを云うた。同時に彼れは盛んに海軍の擴張を努めた。要するに三十七、八年戦役は、一方に於てはアジア十億の民をして其の頭首を擡げしむる動機となつた。同時に、米英二國が日本に對して其の態度を一變し始めたる一大回轉期と見て差支あるまい。固より日英同盟はなほ繼續しつあつたとは云へ。

斯くて從來東亞に於ては、互ひに表向きは親類附合ひをしつつ、内輪

に於ては其の利權を競ひ合つてゐた英米二國は、其の競ひ合ひを中止したとは云はぬが、少くとも日本に對しては同穴の狐となり、言はず語らずの裡に日本に對して其の進出を妨ぐべく凡有る手段、凡有る方便を用ひ來たつた。ただ其事を一切氣附かず、無我夢中であつたのは日本其者であつた。固より日本にも聊か氣附いた者もあつたらうが、たとひあつたにせよ、英米に對して彼れ是れの議論を挾むことは、宛かも一種の國事犯でもあるかの如く看做され、何人も敢てこれに向つて口を挾む者は無かつた。

第五 戦争原因の歴史的觀察 (三)

日露三十七、八年戦役以來、アングロ・サクソンの我れに對する態度は全く一變し、殊に其の心理的傾向は恐怖となり、嫉妬となり、憎惡となり、何時かは日本を叩きつけんとするまでに進みつゝあるを、我が日本に於ては極めて少き有識者を除けば蒙々、慣々、空々、寂々にて経過し

た。其處に我が日本の大いなる病根が伏在したること云ふまでもない。

我等は今まここに日本對アングロ・サクソンの交渉史を語る必要はない。但だ一二の點に就て注意を惹起せば可なりだ。第一次世界大戰は日本が英國に對して、云はば最後の番犬たる御奉公を竭したのだ。信義一途の田舎武士が宛も金毛九尾の狐に誑かされたるも同様、いざ講和會議となりて、世界の舞臺巴里に我が全權が出張するや、五大國の一と云ふ虚名は與へられたが、一切日本が獲得したるものを吐き出ださせられたるばかりでなく、せめては抽象的ではあれ人種平等の立場なりと維持したいと云つて、我が全權が提案したるものさへも叩き潰されてしまつた。其の張本は英米二國である。ロイド・ジョージ、バルフォア及びウイルソンが當然下手者たる責めを負はねばならぬ。斯くて華府會議に至れば、此に大いなる世界史上に大回轉が來た。華府會議には二個の意義がある。第一は米國が英國を引摺り落して自國同様の位地に立たしめ

たることだ。從來英國の海軍は二國標準であつた。然るに華府會議以來一國標準となつた。即ち英國が無敵海軍の位地を去つて、有敵海軍に墜落した。語を換へて云へば英國が米國に向つて叩頭した。第二は即ち英米合體の上、日本を叩きつけたことだ。而して同時に四國條約より九國條約となり、ここに日英同盟は廢棄せられ、日本の東亞大陸に於ける條約上の權益は、殆んど全く取消されてしまつた。語を換へて云へば英國は日本の首を手土産として米國の軍門に降つたのである。

爾來日本は如何なることを爲しつゝあつたか、回想するに我等は頭痛岑々たるものがある。政黨は如何なることを爲しつゝあつたか、官僚は如何なることを爲しつゝあつたか、學者は如何なることを爲しつゝあつたか、實業家は如何なることを爲しつゝあつたか。何れの方面を見ても皆な苟且儉安、情氣滿々の状態を現呈してゐた。其の反動として對外的に日本の正氣が爆發したのが昭和六年九月十八日の奉天城外柳條湖事

件であり、對内的に出で來たつたのが即ち五・一五事件、二・二六事件などである。如何にアングロ・サクソンが精神的に我れを植民地としたるかは、一方に於て我が正氣が滿洲に爆發したるに際し、我が國內一派の迷夢は猶ほ未だ醒めやらす、依然として英米の鼻息を窺ひ、彼等の顔色を窺うて一喜一憂しつつあつたことを以て知るべきであつた。斯くて彼等は國際聯盟に我れを召喚し、宛も刑事被告人同様の取扱ひをなし、一方にはリットン卿を主班としたる聯盟調査委員が、物々しく滿洲に出張するなどのことがあつたが、天未だ我國を棄てず、少數識者の意見は漸く世論の共鳴するところとなり、更らに再轉して昭和十二年七月七日蘆溝橋事件となつた。斯くて蔣介石は英米の前衛として我れに挑戦し、日を逐うて我が勢力が蔣介石一味を追撃するに隨ひ、英米の蔣介石を援助する熱度は愈よ倍加し、やがては所謂A B C Dの包圍陣を作つて、先づ我れを經濟的に壓迫し、戦はずして我れを屈するの謀略を廻らした。

抑もアングロ・サクソン人が日本抑壓の陰謀は、上記の如く日露戦役以來のことにして、それが凡有る方面に蔓延して來たのである。ルーズヴェルトが大艦隊を以て我れを威嚇したのもそれである。我れに向つて人種的差別待遇を施したのもそれである。移民法を制定し、事實に於ては我が移民の既得権さへも取上げて、彼等が粒々辛苦の結果、沙漠を變じて花園となし、不毛の地を改良して沃土となしたるものをも沒收するも同様の始末となつた。而して遂ひに露骨にも我れに向つて經濟壓迫を加へ、彼れの輸入品を禁制するばかりでなく、例へば蘭領印度より我れに輸出する石油の如きさへも彼等の手に依つて之を妨害するに至つた。而して其極が即ち資金凍結であつた。これで多分日本は參るであらうと考へてゐたのが、遂ひに參らなかつたからして、なほ其上に嵩を掛けて我れに向つて獨立國に對する態度でなく、宛も戰勝國が戰敗國に對すると同様の態度を以て臨んで來た。斯くて其の結果が昭和十六年十二月八

感情問題の誤解に
非ず

妥協は絶対不可能

日、大詔渙發となつたことは既記の通りである。

斯る次第であるから此の開戦なるものは、歴史的に見れば明治三十七八年以來の永き陰謀が、凡有る曲折を経て遂ひに表面に發露し來たつたものと云はねばならぬ。従つて此の戦争が一時感情の行違ひより爆發したとか、若しくはちよつとしたる誤解から遂ひに干戈を交ふるに至つたと云ふ如き生ま易しき戦争ではない。彼等は如何なる手段を以ても、如何なる謀略を加へても、是非とも日本を遣りつけねばならぬと云ふ腹黒き心底を以て、長き間計畫し、遂ひに其の計畫が熟して此に至つたものである。されば此際妥協などにて此の戦争を處理するなどといふことは絶対不可能であると覺悟せねばならぬ。既に絶対不可能とすれば、外に道はない、ただ勝つて勝つて勝ち抜く外はない。

第六 米英の對日憎惡と戦後方針(一)

敗戦の實物教育イ
タリア

エマヌエーレ三世
を廢せんとす

ドイツに對する態
度

更らに、翻つて我れが戦ひ敗けたとせよ、然る場合には彼等は我れに向つて如何にせんとするか、それには近き實物教育がある。即ちイタリアがそれである。イタリアは我等とは異なりたる位地を占めてゐる。彼等は白哲人種である、彼等は基督教徒である、彼等はヨーロッパ文化の一部と云はんよりも主なる一部を占めてゐる。而して其のイタリアを誘惑するや、巧言甘語至らざるところはなかつた。然るにイタリアが一度び反樞軸側に色眼を使ふや、彼等はイタリアを取つて押へ、直ちに無條件降伏を強要し、イタリアその土地を以て樞軸國を攻撃する基地となし、更らに又たイタリア國王をも廢して其の與みし易き幼弱の國王を推立てんとした。更らに他の一例は第一次世界大戰の際に於けるドイツである。其のドイツが如何に取扱はれたるかば云ふだけが野暮である。其の苦痛と侮辱に對抗して興つたのがヒットラー及び其の一味である。

我等は更らにこれより米英諸國の所謂戦後の意見なるものを一二紹

大西洋憲章に示されたる對樞軸處理論

介するであらう。ルーズヴェルトは幾回となく日本國民を世界より滅絶し去れと囂言してゐる。又た太平洋艦隊司令長官ニミッツは「日本人の如き野蠻劣等なる人種は世界に存在する必要がない」と云つてゐる。斯る亂暴なる文句を彼等の中に拾ひ上げんとすれば數限りもないが、それはとも角も眞面目なる文句としても我等は決して見逃すべからざるものがある。それはルーズヴェルトとチャーチルとが最初に議定して世界に發表したる所謂大西洋憲章なるものを見るに、其の第八條に曰く「陸海空の軍備が、自國の國境外に脅威を與へ、又は與へる虞ある如き國家によりて使用される限り將來の平和は維持し得ざるが故に、米英兩國は一般安定保障の廣汎且つ恆久的制度の確立するまで、斯る國家の軍備撤廢は不可欠なりと信ずる」と。即ちこれを解釋すれば彼等は日本に向つて軍備撤廢を強要するといふことが明白だ。即ち日本を丸腰にせんとする意味である。更らにそれよりも明白であるは、昭和十七年五月三十日、國務次官ウエルズの演説及び本年（昭和十八年）四月、カナダに於て開

反樞軸太平洋會議の決議

米英の所謂る講和條件

催せられたる反樞軸太平洋會議の決議である。即ち第一、戰爭責任者たる個人、集團及び國民の處罰、第二、戰爭後相當長期に亘り休戰期間を設け、其間には軍備を剝奪する、第三、日本國內に國際檢察官を行使する、第四、支那、滿洲、朝鮮、臺灣より日本の勢力を驅逐する。これが彼等の所謂る講和條件である。無條件降伏どころの話ではない、日本を戰爭以前の狀態に推し戻すといふばかりではない、日本を根柢より滅絶せねば決して承知が出来ないといふ覺悟を彼等は持つてゐる。而して大體に於て英國側も亦た米人と同様の見解を持つてゐる。チャーチル、イーデン輩の口氣に依つてこれを察するに、彼等は日本を丸裸にせぬうちは到底安心が出来ぬものと覺悟してゐる。

x x x

米人の憎惡に對する誤解

日本人の中には今まなほ米人に對して正當なる見解を持つてゐない者がある。されば彼等の或者は、日本がドイツと提携したからドイツの卷添へにて日本も亦た米人から憎惡せられてゐると思ふ者もある。それは

飛んでもない間違ひだ。米人は固よりドイツ人を愛好する者ではない。然しながら若し憎惡の度を比較すれば、彼等が日本に對する、とてもドイツに對する如きものではない。現に米國の輿論を表象するものとして其の統計を見るに、即ち從來ドイツを以て恐るべき敵となしたる米國の輿論は、今日に於てはドイツよりも寧ろ日本であるといふことに一變した。最近行はれたるギヤラップ輿論調査に依れば、日本を現實の敵と見る者が全被調査人員の三分の二を示してゐる。昨年末の結果は四分の一であつたが、それが今日斯の如く急變してゐる。今回のブーゲンビル島沖戰の大勝利は、恐らくは米國の輿論をして九分九厘まで日本を第一の敵と見なすに至らしめたであらう。これは固より街頭の輿論であつて、何時それがまた變動するか知ることは出来ないが、それにしても今日米人が日本人を憎むの情は、恐らくは其の平生嫌惡の標的とする黒人よりも更らに甚だしきものがあるといふことを覺悟せねばならぬ。萬々一日本が彼等に向つて手を差出すも、彼等が欣然其手を握るなどといふ

黒人以上に日本人
を嫌惡す

ことは絶對不可能であつて、然も彼等は日本人の骨を舐ふり肉を啖はねば已まないといふほどである。

第七 米英の對日憎惡と戰後方針(一)

彼等が如何に日本人に對して憎惡の念を露骨に發揮したかは、米國に最も行はれたる、即ち發行部數四百萬を越ゆると稱する寫真週報「ライフ」の誌上に、破壊されたる戰車の砲塔の下に、黒焦げの人間の首が載せられ、其上に鐵兜を冠せたる寫真がある。其の説明には「焼き潰されたる日本軍の戰車の上に、アメリカ軍が据ゑたる日本軍の骸骨」と特筆してある。これが彼等の日本人に對する感情の發露である。而してルーズヴェルトの如きも彼れが人望を博するの途は、ただ日本の惡口を言ふに在りと認めてゐるほどである。ルーズヴェルトの教書を見れば、必らず其中の一部には日本に言及し、然も日本の惡口を様々に云うてゐる。今日では彼れの口から「ジャップ」といふ文句さへも吐かれてゐる。彼れ

「ライフ」に現は
れたる對日憎惡

ルーズヴェルトの
惡口

は曾て斯くの如く述べてゐる

太平洋方面に於ては、北はアリモーションから南はニューギニアに至る戦線に於て、日本軍と對峙してゐる。我々は蔣介石の勇敢なる軍隊に飛行機と重要な軍需品を送つてをり、凡有る犠牲を拂つても印度から敵の占領してゐる地域を通過して、支那に對する物資の空輸を計らねばならない。然し日本に對する戦争の主要目的を達成する道は遠である、我々は占領地を前進せしめ、やがて東西南北四方面から日本の島嶼を攻撃することが出来るであらう

と。彼等は徹底的に日本を遣りつけねば止まぬといふ覺悟を持つてゐる。本來彼等の戦争目的は、何等彼等の存在には關係はない。米國は米國それ自身が一大陸であり、一大世界である。英國も亦た英帝國それ自身が其通りである。云はば彼等の戦争はただ慾の上の慾の戦争であり、增長の上の增長の戦争である。我が日本の生死存亡とは全く同一ではない。然るに贅澤の戦争、物好きの戦争、戦争をする必要の無き戦争をし

慾と增長との彼等の戦争

一切の妄想を捨てよ

つつも、なほ日本を遣り付けねばならぬといふのは彼等の心理状態である。それを相手として命懸けの戦争、國運を賭しての戦争、負くれば二千年の歴史を抹殺するの戦争、實にちよつとも油斷のならぬ戦争を爲す我等が、勝抜く以外に他の方法のあるべきやうはない。されば我等は今更ら事珍らしく云ふではないが、一切の妄想を捨てて眞一文字に彼等の撃滅に向つて努力せねばならぬ。其の犠牲が如何に多くとも、長くとも、久しくとも、一國を滅亡するの犠牲に比すれば物の數ではない。故に我等は總てのものを犠牲として此の戦争に勝ち抜かねばならぬ。

× × ×

英國の對日憎惡感

チャーチルの辯解

英國の如きも日本に對する憎惡の念は、加ふることあるも決して滅することのあるべき筈はない。現にチャーチルは米人が英人の東洋に於ける努力の不足するに慍らず、不満を漏らすに對し、左の如く辯解してゐる。即ち「我等も日本に對して復讐の念は山々である。ビルマも取られた、シンガポールも取られた、マレー半島も取られた、香港も取られ

英は失地回復、米は日本本土攻略を目的とす

た。これ等のものを取られておめ／＼黙つてゐる我等ではない。必らずこれを回復する時節の到来することを疑はないと。ただ英人は失地回復であるが、米人は日本本土を攻略し、日本に向つて城下の盟を強要することを彼等の目的としてゐるといふことは、我等の眼にも其の證據が歴々として映じてゐる。

第八 大東亞興亡の責任

以上は單に日本一國の立場としての見解より是非とも勝ち抜かねばならぬことを語りたるに過ぎない。即ち勝たなければ日本は滅びる、滅びるといふことは文句ばかりではない、地球の上から日本國家が消滅する。故に我等は國家の生死存亡の爲めに勝ち抜かねばならぬといふことである。然し我等が勝ち抜かねばならぬといふことは、決してそれには止まらない。日本は東亞の指導者である。この事は既に日獨伊三國の條約に於ても明文がある。即ち同條約第二條に「獨逸國及伊太利國ハ日本國ノ

日本は東亞の指導者

アジア諸民族と日本

大東亞ニ於ケル新秩序建設ニ關シ指導的地位ヲ認め且之ヲ尊重ス」と述べられたる通りだ。此の指導者といふことは、日本が自から進んで其の役目を買つて出でたといふわけではない。明治三十七、八年戦役以來アジアの諸民族は皆な日本を認めて其の指導者としてゐた。然るに其後も相變らず日英同盟が繼續せられ、世界第一次戦争に際しては、日本は殊に英國の爲めに凡有る努力を拂うた。ある場合には英人の爲めにアジアの同胞の蜂起を鎮定したることもある。従つて折角日本に望みを屬したるアジアの同胞も、日本がアジアの敵たる英國と手を握つて運動するを見て、其の途方に迷うたのも決して無理からぬことであつた。然るに英國は所謂其の海賊本性を暴露し、日本も漸く英國の爲めに欺瞞せられたるに氣付き、其の本然の状態に立歸るや、アジア諸民族は皆な擧つて日本を其の指導者と仰ぎ來たつた。斯の如くにして遂に英米に對する開戦となり、其の結果は日本の手にて殆んど英米の東亞に於ける勢力は驅逐せられ、こゝにアジアの諸民族は漸くほつと一息を吐き來たつた。斯

英國の本性暴露と日本の本然復歸

有史以來の一大責任

アジアの一體化は當然の歸結

日本の勝利無くばアジアに希望なし

る明白なる事實の前には、日本も今は自から指導者たる途を採るより外には道はなかつた。日本が自から其責に任せざれば、誰れも日本に代つて任する者はない。従つて今日の日本は一億日本國民を背負つて立つばかりでなく、十億アジアの同胞を背負つて立つところの、有史以來未曾有な一大責任を負ふこととなつた。これは固より我が肇國の國是たる八紘爲宇の大精神を實現する所以にして、日本歴史の行程から見ればこれ亦た自然の發展と云はねばならぬ。斯の如くにして今まや中華民國も重慶政權を除くの外は我れに相ひ頼り、滿洲國は云ふまでもなく同心一體であり。タイ、ヒリッピン、ビルマ及びやがて佛領印度支那ならびに印度も亦た斯の如くならんことは當然の歸結と云はねばならぬ。従つて過日東京に於て行はれたる大東亞會同の如きも亦た其の事實を物語る一の行程と見ねばならぬ。さればヒリッピン大統領ラウレル氏が、日本の勝利無くばアジアに希望なしと大聲疾呼したるは、單りヒリッピン人の希望ばかりでなく、アジア十億の人は皆な同一の意見であることは我等の

堅く信ずるところである。

x

x

x

西歐文明と東洋文化

東亞文化向上の絶好機

凡そ歴史あつて以來、西力東漸したることあれば、東力西漸したることもある。従つて其間に於ける文化の交流は、歴史の上に徴すべきものが少くない。然も饒つて考ふるにギリシヤ、ローマを根源とする西歐文明と、悠久幾千年の昔に發生したる印度、支那、日本の文化とは、自から其の種類を異にするものがある。而してアジアの文化其物として、亦た各國各種のものがあるが、然も其の各種のものに就てこれを綜合大觀すれば、自から東亞の文明其物が儼然として此に見出ださる。これ等の學術的見解は姑らく他日に譲り、とにも角にも今日は政治上に於ては東亞がアングロ・サクソンの羈絆を脱し、文化上に於ては東亞は東亞独自の文化を向上すべき、所謂千載一遇の好機に際會してゐる。而して其の運命を決するの大責任は、東亞の指導者たる日本がこれに任せねばならぬ。若し日本がこの戦争に勝ち抜けば、即ち日本は一億日本人

を救ふばかりでなく、東亞十億人の救ひ主たることが出来る。若し萬一これに反すれば、日本は日本一國を滅亡せしむる責めを負ふばかりでなく、東亞其物を滅亡せしむる責任も亦た我等が逃れんと欲して逃るゝ能はざるものである。従つて今回の戦争はこれを小にしては一億國民の生死存亡の戦争であり。これを大にしては十億東亞諸國民の生死存亡の戦争である。我等が何物をも犠牲として勝ち抜かねばならぬといふことは即ち此に存してゐる。

第二篇 何故に我等は必勝するか

(必勝の基本)

第一 大義名分の戦争と不正不義の戦争

天は正義に與みし、神は誠實を助く。戦争の全局に於て我れが必勝すべきは自明の道理である。我等は以下に於て少しく何故に我れは必勝すべきかに就き觀察するであらう。

× × ×

第一に我れは自衛自存の爲めに戦うてゐる。第二に我れは大東亞解放の爲めに戦うてゐる。第三に我れは世界新秩序建設の爲めに戦うてゐる。此の三大目的は同心圓にして、其の根本は我が皇國の生命を保全するが爲めに始まり、世界をアングロ・サクソン人の暴戾抑壓より脱却せ

自衛自存の戦ひ
大東亞解放の戦ひ
世界新秩序建設の戦ひ

大義名分我に兼備す

しむるを以て終りとする。斯くの如く我が戦争目的は天日を観るが如く明々白々にして、所謂大義名分皆な我れに兼ね備はつてゐる。

米英は東亞擄取の要なし

翻へつて彼等は何の爲めに戦ふか。ルーズヴェルトは曾て「我等は生きたるが爲めに戦ふものである」と云うた。然も彼等は東亞を擄取せずとも自から生きる餘地と餘力は澤山ある。南北アメリカをモンロー主義にて張り廻して、一切他人に手を着けしめぬといふ陣構へをなしつつある彼等としては、其上にも東亞にまで手を延ばして東亞の土地を占領し、人民を擄取せねば生存が出来ぬといふ理由は全くない。されば寧ろ彼等は生きたるが爲めの戦争ではなくして、東亞十億の生靈を殺さんが爲めの戦争といふが事實に幾しと云はんよりも、事實其物である。

米英の所謂るデモクラシー

またルーズヴェルトはデモクラシーの爲めに戦ふと云ふが、これも亦た嘘の骨頂である。所謂るデモクラシーとはリンカーンの云つた「人民

猶太人の巢窟

ユダヤ人の戦争商賣

米國到る處カポネあり

に依る、人民の爲めの、人民の政治」にて、人民本位の政治である。人民本位と云へば人民平等を原則とせねばならぬ。然るに今日の米國は如何。人民本位などといふことは名のみであつて、其實は金持に依ての政府、金持の爲めの政府、金持の政府である。然も其の金持の背後には所謂る世界の悪魔たる、人類の呪ひたる猶太人が控へてゐる。米國のデモクラシーなるものは云はば猶太人の巢窟である。さればデモクラシーは全く名のみで其實は最悪最醜なる金權政治である。彼等が如何に一千五六百万人の黒人を虐待するか、又た如何に暴力團が横行して法律を無視し、秩序を無視し、凡有る悪事を爲すか。世間ではただカポネ一人を暴力團の代表者の如く云ふが、米國の東西南北何れの所にかカポネ無からんやだ。ニューヨーク然り、シカゴ然り、其他の都府皆な然らざるはない。さればルーズヴェルトの心持を云へば此の戦争はデモクラシーの爲めではなくして、ユダヤ金權の爲めに戦ふといふことが極めて明白である。如何にユダヤ人が戦争を一種の商賣と心得てゐるかは、第一回世界

大戦争の砌り、ウイルソンが戦争の八合目とも云ふべき時に加入するや、其の軍費を投じたる三百五十四億二千三百萬弗に上つた。然るに米國の商人は其の戦争で三百八十億弗の利益を得た。然も其の利益の三分の二、二百五十億弗はウイルソン背後のユダヤ人の手に落ちた。前例斯の如し、今日に於て此の戦争にユダヤ人の手が如何に動いてゐるかは今更ら證議立てをする必要もあるまい。

第二 大西洋憲章の解剖

又たチャーチルの如きは、戦争の目的に就ては、彼れほどの饒舌家にして未だ曾て世界の人を納得せしむる如き立派なる説明を與へてゐない。若し彼等の戦争目的と云はば、今次世界大戦開始の當初に於て彼れとルーズヴェルトが大西洋上、今まはマライ半島沖の海底の藻屑となりたるプリンス・オブ・ウェールズ艦上に於て議定したる大西洋憲章に外ならない。さて其の大西洋憲章を仔細に點檢するに第一條は

彼等の戦争目的

他國の領土擴張に
反對

英米兩國は領土的その他の擴張を認めず。
と云うてゐる。彼等は既に世界制覇の野望を遂げ、又た遂げんとしつつあるものなれば、樞軸國其他の領土的擴張に反對するは當然のことである。

第二條は

英米兩國は關係諸國の自由意志に合致せざる領土的變更の生ずることを欲しない。

と云うてゐる。然し前條は自分等は勝手に他國の領土を斬取り強盜してゐるが、他國は黙つて控へてゐるといふことになり、本條は自分等の勝手に他國の領土を切盛りすることは欲しないといふことである。それを裏面から云へば自由意志にさへ合致すれば如何なる分割、切盛りも勝手次第といふことになつて、既に其例は第一回世界大戦の終極に際し、ヴェルサイユ條約がこれを語つてゐる通りである。

政治形態の自由と
主權の回復

印度に對する搾取
は如何

各國の經濟的繁榮
に努力

第三は

英米兩國はすべての國民が其の生存の政治的形態を選擇する自由なる
權利を尊重し、暴力を以て奪はれたる主權及び自治權が回復されるこ
とを欲する。

若し此通りでありとすれば、何よりも彼等は印度の自由獨立を許さね
ばならぬ。然るに印度三億五千萬の人民が熱心にこれを追求するに拘は
らず、依然軍隊の力を以てこれを壓抑し、幾千萬の人民を餓死せしめて
までも、なほこれを搾取の犠牲に供しつゝあるを見れば、斯の如き文句
が空題目であるは云ふまでもない。

第四は

英米兩國はすべての國民が其の經濟的繁榮の爲め必要とする貿易及び
原料を均等の條件を以て獲得することの保障を與へることを當然の義

務として努力する。

と云つてゐるが、これほどの誠意があつたならば何故に彼等は我が日本
に向つて貿易の道を塞ぎ、原料の供給を妨害し、日本をして經濟的に木
伊乃同様たるの政策を施したるか。彼等の言行不一致はこれを以て知る
ことが出来る。

第五に

英米兩國はすべての國家が其の經濟的利益と個人的並に社會的安全を
保障する目的を以て完全なる經濟的協力を實行することを要望する。
これも亦た眞赤な嘘だ。彼等はただ英米兩國の壟斷的利益を主として、
一切の國家の經濟的利益や、個人的安全や、社會的安全やは眼中に置か
なかつた。

利益と安全の保障

彼等の言行不一致

第六に

ナチス・ドイツの暴政打倒の後、英米兩國はあらゆる國に自國の領土内で安全に生活し得る方途を供與し、同時にあらゆる國土の人民が恐怖と缺乏なく自由に生活し得る保障を與へ得る如き平和を樹立することを希望する。

これはナチス・ドイツに對しての文句であるが、この憲章は昭和十六年八月十四日發表せられたるものであつて、日本とは開戦以前であるから日本を加へなかつたが、今日から見ればナチス・ドイツの代りに、若しくはナチス・ドイツと共に日本を此の條項の中に當て嵌むることは云ふまでもない。即ち日本や獨逸を打倒さへすれば、其後は總ての國に凡有る幸福を與へるといふ此の空手形は、全く以て眉唾物である。現に印度の如きは前回の大戰で英國より驅り立てられ、其金と血を絞つて、平和の後には印度に自由を與へ、自治を與へ、獨立を與へるなどと甘言美語至らざるなかつたが、其後に至つては全く前に倍する抑壓を與へられてゐた。論より證據、今日生ける證人はチャンドラ・ボース其人である。

彼れが本年（昭和十八年）十一月十四日、東京日比谷公會堂にて、滿腔の悲憤を絞りて陳述したるところを聞けば、最早や此の箇條を辯駁する必要はない。

× × ×

第七に

かかる平和はあらゆる國民をして公海と大洋とを何等の干涉なく航海し得るといふものなるべきを要す。

此の海洋自由なるものに就ては、英米兩國の間に屢ば見解を異にして爭論を惹起してゐるが、何れにせよこれは彼等だけの自由であつて、他國に與ふべきものでないことは云ふまでもない。最も注意を要するは即ち第八條である。即ち

英米兩國は世界のあらゆる國が現實的且つ精神的理由により暴力の使用を放棄すべきものなることを確信する。陸海空の軍備が自國の國境外に脅威を與へ、乃至は與へる恐れあるが如き國家によりて使用さる

日獨の丸腰を企圖

る限り將來の平和は維持し得ざるにつき、英米兩國は一般安全保障の廣汎且つ恒久的制度の確立までかゝる國家の軍備撤廢は不可缺であると信ずる。英米兩國は軍備の壓倒的重荷を、平和を愛する國民から輕減すべき實際的手段を援助助成せんとするものである。これで見れば即ち日本や獨逸は、英米から軍備撤廢を申渡され、丸腰にならねばならぬといふことになつてゐる。

× × ×

現狀維持復讐が目的

以上に就て吟味すれば、要するに彼等の戰爭目的なるものは、世界を彼等が我が物顔に支配する、若しくは管轄する爲めには、少くとも現狀維持をやり、若しくは戦前に於ける現狀維持に回復するといふことを目的とするといふ以外に、何等認むべきものはない。例へば蘇聯などはこれに大不服にて、若し戦前に回復するといふことになれば、ポーランドも復活せねばならぬ。チェッコスロヴァキアも復活せねばならぬ。其他凡有る點に於て蘇聯には極めて不利益なる状態を現出する爲めに、蘇聯

ソ聯の反對

大西洋憲章は一片の空手形

からは横槍を挟み、其爲め大西洋憲章も其儘では實行は難かしい、時に應じて變通の必要があると、ロンドン・タイムスなどでは論出するに至つた。されば大西洋憲章も、云はば一片の空手形に過ぎないのだ。

第三 不可解なる米英の戰爭目的

英米兩國の戰爭目的に就ては、單り我等が其の不可解を認むるばかりでなく、米國人にして、曾て共和黨の大統領候補者となり、ルーズヴェルトと雌雄を争ひ、一敗の後にはルーズヴェルトの走狗となつて世界各國を飛び歩きたるウイルキーが「世界は一なり」と題する新著の中にも其の苦情を鳴らしてゐる。彼れの云ふところに依れば

我々は果して何の爲めに戦つてゐるのであらうか。反樞軸各國の指導者は勿論、異なつた各國民が彼等が何の爲めに戦つてゐるか、前線の將兵の心の武裝とも云ふべき理念について、何等意見が一致してゐないことは全く驚く外はない。

ウイルキーの苦情

反樞軸諸國の意見
不一致

スターリン議長は一九四二年十一月六日、十月革命の二十五周年に當つて戦争目的に就て聲明し、ルーズヴェルトは四つの目的を闡明し、ルーズヴェルトとチャーチルとは大西洋憲章を發表した。然しスターリン議長の聲明も大西洋憲章も同様の誤謬に陥つてゐる。即ち西歐洲を從來の各小國に分割し、獨自の政治的經濟的軍事的主權を與へようとしてゐるが、以上のやうな舊い考へ方では到底ヒットラー總統の新秩序案に對抗することが出来ない。西歐洲を安定させようとするならば、政治的單位として歐洲に小國を再建するのはよいが、經濟上軍事上の單位として小國を復活することは誤りである。

× × ×

ウイルキーズは又た曰く

全世界各國人は、果してこれらの宣言を發表した指導者達が宣言を實行する意志があるかどうかを固唾を呑んで見守つてゐる。自分は各國を巡回し、凡有る國の首相、外相は大西洋憲章は西歐洲にだけ適用さ

れるのかと質問した。自分はチャーチルの意圖はわからないが、英國首相が大西洋憲章は主として歐洲各國を目標としてゐると云つたのだから、必ずしも他の各國を除外するわけではないだらうと返事したが、相手は我慢し切れないといふ様子で、貴下の意見はこじつけて詭辯に過ぎないと予の主張を一蹴した。

其後チャーチルが、我々は我々の持つてゐるものをしつかり握つて行くつもりだ、自分は英帝國の清算事務を監督する爲めに皇帝の第一の閣僚になつたのではない、と述べたのを聞いて自分がひどく悲觀したのは以上の事情に基づく。又た北アフリカ地方に於ける米國政府の遣り口も自分に取つては悲劇としか見えない。「一時的軍事上の便法」といふ言譯でダルランとの取引が始まつたのは、歐洲各國人ばかりではなく、重慶に於てさへも、米國政府に對する信賴が打撃を受けた、米國內に於ても米國政府が専ら防衛の爲めに戦争してゐるのだと信じてゐた人々の間に疑惑を呼び起し、再び孤立主義が擡頭するに至つた。

物質慾の爲めに生
死する敵兵

生還を期する敵兵

死する時に何と叫ぶか。彼等は誰れの爲めに生き、誰れの爲めに死するか。彼等はただ物質慾の爲めに生き、物質慾の爲めに死するものである。我が軍隊は一度び家門を出づるや、固より生還を期してゐない。然るに彼等は宛も遊山にでも出掛ける如く遠征の途に上つて行く。彼等は始めより生還を期してゐる。死することは彼等の希望でもなければ目的でもない。又た死するなどは決して考へてはゐない。萬一死することがあつたならば、それは所謂不幸であり、不運であり、偶然の災害であると考慮する以外には何物もない。

× × ×

海賊的勇氣と山賊
的辛抱力

固より彼等とても本來臆病ではない。英國のアングロ・サクソン人は海賊根性であるが、それが米國に移住しては更らに山賊根性を加へて來た。彼等は本來山の如き波濤も凌ぐだけの勇氣も持つてゐる。如何なる艱難をも冒すだけの辛抱力も持つてゐる。平時に於ても重賞さへ懸くればナイヤガラ瀑布を一飛びに飛び降る者も皆無ではない。然しながら彼

忠義なき彼等

忠誠なる我が皇民

等の勇氣は海賊的勇氣であり、山賊的勇氣である。せい／＼のところは獅子狩りや虎狩りの勇氣である。従つて彼等には國家に對する義務とか、元首に對する忠義などといふことは夢にもない。我が一億の皇民は三千年來忠良の臣民として、歴代の皇室の撫育を忝くし、以て今日に至りたるものの子孫を幹部としてゐる。其の新附の臣民さへも此の忠誠の心は幹部臣民に依つて指導せられ、誘掖せられ、感化せられてゐる。此に我が必勝の將兵即ち不敗の將兵の本質は、儼然として存在してゐる。

× × ×

持場を劃定

更らに我等には一定の地域がある。我等は世界を舞臺として戦争してはゐない。我等樞軸國は互ひに相ひ提携し、互ひに相ひ戮協してはゐるが、各々其の劃定せられたる持場がある。獨逸とイタリアとは歐洲大陸が其の持場であつて、アフリカ、アジアの西方及び其の附近の海洋は當然彼等の持場である。日本の持場は大東亞である。而して大東亞を圍繞し、これに接近したる海洋亦た固よりそれである。如何に三國協定して

自家門前の雪を掃
ふ

世界を戰場とする
英米

ゐるとは云へ、我が軍隊を歐洲大陸に輸送せざるは、猶ほ獨逸の軍隊を、我が東亞に輸送せざると同一である。所謂銘々自家門前の雪を拂ひ、従つて其の結果は自他の門前が綺麗に片附くこととなる。斯くて同盟の實は擧がつて行く。又た我が戦争の地域は、たとひ一萬方料に及ぶとは云へ、決して世界を相手としての戰場ではない。これに反して英米二國は世界を擧げて其の戰場としてゐる。即ち彼等は即今イタリアの南部にも出兵してゐる、アフリカにも出兵してゐる、アジアの西部にも出兵してゐる。米國の如きは更らにグリーンランドより北氷洋附近までも出兵してゐる。而して支那にも出兵し、北アイルランドにも出兵し、濠洲にも出兵し。所謂アリューシャン列島より太平洋に至る間、凡有る陸上、凡有る海上、彼等の出兵しない土地はないと云ふも差支ない程である。

常山の蛇勢

所謂常山の蛇とは、頭を打てば尾が應じ、尾を打てば頭が應じ、中腹を打てば首尾兩ながら相ひ應ずると云ふが、彼等が世界到るところに

八面戦争

軍隊を分散したる結果は、とても常山の蛇たることは出来ない。此頃蘇聯より迫られて第二戦線を頻りに促がされてゐるが、若し彼等が第二戦線に全力を盡くす時には、勢ひアジア方面は空とならざるを得ない。彼等は兩面戦争ばかりでない、殆んど八面戦争である。これに反し我等は北方の護りは嚴平として金城鐵壁であるが、蘇聯が中立條約の誓ひを渝へざる間は、我れも亦た斷じて其約を破らない。軍備に於ては如何なる萬一の出來事にも應ずるだけの覺悟はあるが、我等は猥りに自から進んで兵を動かすことはしない。従つて我力はアジア方面、特に英米に對して用ひる餘裕が綽々としてある。固より重慶政權が猶ほ殘存してゐるが、彼等は英米の前衛であるから特にこれを語る必要はない。

我力は餘裕綽々

第五 勢力集中と勢力分散

全きを以て分散に
當る

兵法の要は、我れの全き數を以て敵の分散したる數に當ることである。劉玄德が呉と戦ふに際し、營を連ぬる七百里、遂ひに陸遜の爲めに

破られたのもそれである。假りに反樞軸國が量に於て、數に於て日本に十倍するにせよ、若しくは百倍するにせよ、彼等は常にそれを世界の各所に分散してゐる。米國は生産能力が世界第一でありと稱するも、自から民主國の造兵廠を以て任じ、其の生産したる武器は蘇聯にも、英國にも、濠洲にも、少數とは云へ重慶政權にも分配しつつある。彼等は武器貸與法に基き、米國に於ける食糧生産額の二十五パーセントを海外に送らねばならぬ。而して單に蘇聯に向け發送したるものみにて、鋼五十八萬トン、アルミニウム、デュラルミン四萬六千トン、亞鉛二萬一千五百トン、銅、眞鍮、ニッケル、モリブデン九萬四千トン、トルオール、トリニトロトリオール五萬トン、其他軍需工場用化學藥品七萬五千トン、鋼鐵レール七萬五千トン、鐵道用具一萬七千トン、石油類二十六萬八千トン、野外電話機數百臺、電話線數十萬哩、貨物自動車七萬二千五百臺、高性能自動車一萬七千五百臺、自動自轉車七千七百臺、軍用トラクター千三百臺、軍靴三百萬足、靴底革一萬八千トンに及んでゐる。蘇聯一國

にしてさへ斯の如し。即ち武器貸與法は英國援助が主なる目的であつて、最初に昭和十六年三月、七十億ドルの豫算を計上支出したが、其後蘇聯や重慶政府なども其内に加はり、遂ひに昭和十八年即ち一九四三年五月には新會計年度（一九四三—一九四四）に於て、武器貸與法新豫算は百六十二億七千三百萬弗を計上した。而してそれが昭和十六年三月實施以來現在までに浪費したるもの總計二百四十億弗といふ巨額に上つてゐる。民主國の造兵廠たる役目も決して容易の業ではない。彼等は百の力とするも、これを十に分割すれば十の力に過ぎない。我れは常に我が全き力を以て彼れに當つてゐる。此に我が必勝の算は明白である。

第六 三脚競走

更らに彼等は烏合の衆である。内國的にも協和を缺き、同盟國的にも一致を缺いてゐる。假りに英米の關係に就てこれを觀察するに、彼等は宛も狐と狸の同盟であつて、互ひに誑し合ふことを専務としてゐる。

英國の財産を狙ふ
米國

米國を煽つて儉安
する英國

米國は何よりも英國の足許をつけ狙つてゐる。而して英國の財産を片つ端より巻き上げんとしつゝある。其の英國も亦たまんざらこれを知らぬではない。たゞ當座の苦しさに米國を頼みとし、自から醜態の極みを盡くして米國の機嫌氣味を取り、米國を煽つて上げて英國一日の安きを儉まんとしつゝある。米國は勿論シヤイロクである。英國の胸の肉を抵當とせざれば、一隻の驅逐艦も、一臺の飛行機も容易に貸與するものではない。何はともあれ英國の苦しむことは米國に取つては勿怪の幸せとし、これで悠悠々として世界的大帝國なる英國の肥えたる肉に飢かんとしつゝある。英國はこれを知りつゝ、いざとなれば米國よりの借金を踏倒し、抵當に與へたるものを無造作に取戻さんとしてゐる。要するに狐と狸の勝負であれば、何れに團扇の揚げやうもない。然し米國の惡辣なることは、曾て破れ驅逐艦を以て、西印度洋附近に於ける英國の海軍根據地を借租したるを手始めとし、カナダも我物なり、濠洲も我物なり。アフリカの大陸、地中海の沿岸、シリア、レバノンの方面、アラビア、イラン

米國の惡辣性

米英の協力思ひも
寄らず

マコーミックの英
帝國分割論

ケランドの米英同
盟論

及び遂ひに印度にまでも米國の手は延びてゐる。つまり英國の世界帝國の凡有る方面に、米國は既にそれ／＼抜くべからざる手を打つてゐる。斯る次第であるから彼等が力を同じくして互ひに樞軸國を擊滅せんなどとは固より思ひも寄らざることである。米國などは獨逸や日本を叩くよりも、手近なる英國を叩いた方が勞少くして效多きことを熟知し、其の方面に決して油斷なく手を廻してゐる。更らに米國では英國に恩を着せ、寧ろ此際進んで、曾てチャーチルが佛國に向つて英佛合併を主張したる如く、米英合併を主張する者もある。即ち米國シカゴ・トリビューンの社主ロバート・マコーミックは、公然英帝國分割論を主張してゐる。彼れは「英國、カナダ、濠洲其他の諸國が外交政策、國防、貿易並に通貨等に關聯し、米國との一層緊密なる提携を希望するならば、寧ろ彼等は新しき州となつて合衆國に加入すべきである」と放言してゐる。又た米國共和黨上院議員のケランドは米英同盟論を主張し、アメリカの國防線をグリーンランド、アイスランド、カサブランカ、ダカール及び南米

新型帝國主義
新版モンロー主義

沿岸諸島地、現在米洲以外の國の所有してゐる諸島までも擴大すべしと云つてゐる。これでは同盟と云ふがイギリスの領地を全く分割することになる。されば英國側ではこれを評して新型帝國主義、或は飛躍的擴大せられた新版モンロー主義と冷評してゐる。然し事實はなかく冷評どころではない。チャーチルも「予は英帝國の清算人となる爲めに首相となつたのではない」と颯言した通りで、英國側では又たそろ／＼米國の勢力の滲透しつつあるを防止する爲めに手段を講じてゐる。而して米國が己れ獨りで樞軸軍に當りつつあるかの如く振舞ふを面憎しとして、英國の努力も其の效果に於ては寸毫も米國のそれに劣つてゐないなどと抗議を申し込んでゐる。

英國の抗議

米英蘇三國の關係

更らに彼等の味方に蘇聯がある。蘇聯は我國とは不可侵條約を結んでゐるから沒交渉であるが、たゞ我等は此の三國の關係に就て觀察して見たい。英國も米國も苦しき時の神頼みで、平生は蘇聯を蛇蝎の如く忌み

× × ×

蘇聯を叩き附けんとしたるチャーチル

共産主義を仇視するルーズヴェルト

アングロ・サクソンは蘇聯の恒久の敵

蘇聯、英佛を翻弄

且つ怖れてゐながら、今まは蘇聯を殆んど救世主として崇め奉つてゐる。凡そ世界に蘇聯を憎むものチャーチルほどの者はなかつた。第一次世界大戰後、彼れが如何に凡有る手を打つて蘇聯を叩きつけんとしたかは、歴史的の事實にして、餘りに其方に熱中して遂ひにチャーチルは自國に於ける自己の地位を失脚するに至つたほどである。又たルーズヴェルトも共産主義を眼の仇として、今ま尙ほ自國內に於てはこれを退治するには餘力を愛んでゐない。然るにチャーチルは、苟しくも樞軸國に反對するものは、惡魔と雖も我が友人であると公言し、遂ひに自から努めて蘇聯の手を握らんとしつつある。蘇聯の方では又た同様に歴史的にアングロ・サクソンとは相ひ容れない。獨逸は一時の敵であるが、アングロ・サクソンは恒久の敵である。蘇聯がアングロ・サクソンを心の底から嫌つてゐることは、獨逸に勝ること萬々である。さればこそ曾て英佛の使者が堂々とモスクワに乗込み、同盟條約を締結せんとする最中に、却つてリッペントロップと與に獨蘇不可侵條約を結び、英佛の使節の團

蘇聯の對米英眞意

アングロ・サクソンの消耗は蘇聯の幸福

體をして啞然たらしめたるに至つたのだ。されば今日たりとて彼等は決してアングロ・サクソンに對して頓に好意を表するといふのではない。たゞアングロ・サクソンより武器を絞り、金を絞り、兵を絞り、絞り得るだけは絞つて以て自己の急を救はんとするに過ぎない。さればアングロ・サクソンが幾百萬の兵を失うても、幾千萬臺の飛行機若しくは戦車を失うても、幾百萬トンの軍艦若しくは船舶を失うても、蘇聯に於ては決して一滴の涙をも流すべき筈はない。寧ろ蘇聯は其の消耗の爲めにアングロ・サクソンが其の勢力を失ひ、他日蘇聯の憂ひを爲さざることを密かに祝福するに過ぎないであらう。

英米の對蘇政策

これに反し英米側では蘇聯をして西は獨逸に當らしめ、東は日本に當らしめんと欲し、殊に對日本に就ては彼等が或は懇請し、或は恐喝し、脅したり賺したり騙したりして、日本と葛藤を惹起さしめんと欲してゐることは明々白々の事實である。然しスターリンは決してチャーチルや

スターリンは先づ蘇聯の立場を考慮す

名は三國會談、實は二國會談

三者銘々の目的

ルーズヴェルト、イーデン、ハルの口車に乗る如きお人好しではない。彼れは誰れよりも先づ蘇聯彼れ自身の立場を考へてゐる。それで彼れが三國執権者の會議が開かれても未だ曾て出席せずして、何時も觸れ出しには三國と云ひつつ、實際になれば例に依りて例の如く、チャーチル、ルーズヴェルトの會談に止まるはこれが爲めである。頃ろモスクワに三國外相の會議があつて、ハル、イーデンは遙々出掛けたが、これに應接したるもモロトフ外交委員長のみで、本尊のスターリンは遂ひに其の會議には顔を出さずしてやんだ。最近漸くテヘラン會議に一寸顔を出したが、不得要領に終つた。此の三國は宛も三脚競走の如く、折角三人を一組にしても三脚競走ではとても物にはならない。要するに三者銘々の目的があつて、互ひに其の懷を狙ひ、足許を狙ひ、互ひの弱點につけ入らんとしつつあるから、當面の敵に向つて一大猛進撃を爲す如きは到底望むべくして期すべからざることだ。

第七 莫迦の天國

米英の内部
罷業同盟の間屋

ロイド・ジョージ
自國労働者を持て
餘す

英國労働黨戰爭を
非難す

彼等相互の關係は前記の通りであるが、我等は更らに彼等の内部に就て語らねばならぬ。英國は所謂罷業同盟の間屋にして、前世界大戰の時も全くそれで困り切つてゐた。獨逸の兵がパリに迫り、又た英佛海峡を扼せんとする際にも拘らず、英國の労働者は政府の弱味につけ込み、頻りに賃金値上げを迫り、若しくは労働時間短縮を迫り、労働者待遇の改善を迫り、當時の宰相ロイド・ジョージをして殆んど當惑せしめた。此事はロイド・ジョージの「世界大戰回想録」に詳しく語つてゐる。其の狀態は今日も何等變つてゐない。今まに於てもスコットランド、ウェールズ方面の炭坑地方に於ける罷業や、若しくはグイッカース其他の造兵、造船各場に於ける罷業同盟は殆んど絶ゆるひまはない。而して労働黨は動もすれば戰爭其物に對して大いなる疑團と大いなる非難を抱き且つ加へつつある。今日英國の首相チャーチルの最も苦心したるは、彼

三主に仕へるチャーチル

英國の舉國一致は不可能

米國は世界の人種
展覽會

米國第一主義を誇る

れが三個の主人によく仕へることである。第一は米國、第二は蘇聯、第三は自國の労働者である。今日も内閣に於ける獅子の分配は労働黨が持つてゐる。若し労働黨の機嫌を損せんか、英國の内閣は木ツ端微塵となる。それ程までに労働黨は優勢である。それで英國が眞正の意味に於て即ち我が皇國に於ける如き意味に於て舉國一致の實を擧ぐるなどといふことは到底思ひも及ばぬ話である。

x

x

x

米國に至つては全く世界中の人種展覽會とも云ふべき土地柄である。一千五六百萬の黒人は心からして白人横暴を呪うてゐる。獨逸系でも數百萬ある。其他アイルランド及び北方スカンデナヴィアの諸系、或はハンガリー、殊に南方イタリア系の如きは決して侮り難き勢力を持つてゐる。これらの混合人種の中に於て、其の統一を求むることは容易でないが、然も世間で思ふほど不統一ではない。彼等は何處までも米國第一主義を以て世界に誇つてゐる。此誇りは不思議にも凡有る人種をして我れ

同根の大和民族
モザイク細工の
米國民

米國の階級争闘
労働者の大立者ル
イスの存在

はアメリカ人なりとの自覺を興へてゐる。然しながら元とこれ同根より生じたる我が大和民族の如きものと、モザイク細工たるアメリカ國民とを同一視することは到底出來得べきものではない。

・更らに米國の階級的争闘に至つては、實に恐るべきものである。今日に於ても労働者の大立者ルイスの如きは一大恐怖の存在として、常にルーズヴェルトの夢を魘してゐる。米國では大統領の和解ぐらゐるでは労働争議が納まらず、軍隊の力を出だしてこれを納めねばならぬほどになつてゐる。今日でさへも失業者はなほ五百萬人から一千萬人の間を上下してゐる。労働争議は絶ゆることはない。

取らぬ狸の皮算用

斯の如く國內的に見ても、國外的に見ても、彼等の中には一致もなければ團結もない。たゞ彼等は漠然たる戦後の利益を夢み、所謂取らぬ狸の皮算用で、ともかくも樞軸國を相手として戦うてゐるのだ。即ち一

マウントバツテン
とマツカーサー

例を挙げれば英將マウントバツテン、米將マツカーサーは各々其の戦闘の地域を定め、前者はスマトラ、タイ、佛印方面への進攻上陸作戦を指揮し、後者は西南太平洋の作戦地域よりジャワ、スマトラ、ボルネオ、ヒリッピン方面の指揮を執るといふ如く各々其の勢力範圍を極め、やがては戦後に於ては英國はビルマ、マライの外にタイ、佛印を併呑し、北ボルネオの代りにスマトラを其の領域とし、米國はヒリッピンに加へ、ボルネオ、ジャワ、セレベス、ニューギニア、西南太平洋諸島を我領とし、斯の如くにして支那大陸をアングロ・サクソン人共同の市場として、其の利益を壟斷せんとするもの如くである。斯る例は此の以外にも澤山ありて、彼等はまるで戦後に於ては歐洲と云はず、東亞と云はず、世界を米英兩國にて分割せんとする如き妄想を持つてゐる。我等はこれに向つてたゞこれが所謂莫迦の天國といふものであらうと云ふの外はない。

世界分割の妄想

第八 物的要素

勝敗の三要素

物的要素
人的要素
靈的要素

凡そ勝敗の要素には、物的、人的、靈的の三者を計上し、これを總和の上に於て對照比較せねばならぬ。物的とは食糧より兵器一切に至るまでを謂ひ、人的とは第一線の將兵より後方一切の勤務者を謂ひ、靈的とは戦闘員は勿論、一切の非戦闘員を舉げて、其の戰爭に對する心理的狀態を謂ふ。即ち此の三者の中に於て、彼我各々長短、得失ありとするも、一切をおしくるめて其上にて優勝したる者が即ち勝利者であることは當然の理である。而してこれに依つて判下すれば、我れに必勝の算ありて、彼れに必敗の數あるは論を俟たない。

持つ國と持たぬ國

元來彼等は持つ國として立ち、日本は持たぬ國として指點せられてゐた。即ち我等自身も亦たそれを否定するわけにはいかない。従つて米英兩國は我れの物的價值を極めて低下に見積つた。一口に云へばごまめの

米英の對日過小評
値

泥で作つた足

齒軋りで、如何に日本人が日本精神などと威張つても、腹が減つては戰さは出來まい、戰はんとするも武器が無ければ、裸で戰することは出來まい。それで彼等は始めより、日本は打つても、蹴つても、踏んでも起つものでないと見縊り、たとひ起つても所謂「泥で作つた足」で、倒れるものと豫定してゐた。殊に石油國たる米國は、日本の石油の貧弱なるを熟知し、如何に日本が焦躁して蘭領印度の石油を取らんとするも、石油産地に到着せざる以前に、日本は石油に窮して進退動作の自由を失ふであらうと信じ、かくて米國海軍長官ノックスの如きは、三個月以内にはきつと日本を遣りつけると豪語してゐた。彼等は如何に我が海軍が、彼等の豫想以上に石油を貯藏してゐたかに氣付かず、又た更らに其の貯藏してゐた石油を、如何に有効に、有利に、而して儉約に使用するかに思ひ及ばなかつた。今まや蘭領印度は勿論、所謂戰爭に必要なる資源は、悉く我れの有となつて、敢て全く顛倒したとは云はぬが、軍需品其物に就て云へば、持つ國であつた米英兩國は殆んど持たぬ國となり、

ノックスの豪語

資源の顛倒

米のゴム飢饉

動力難

河に溺れて水に困る

持たぬ國であつた日本は却つて持つ國となつた。例へば日本は從來海外輸入に依つた鐵礦、クローム、ゴム、キニーネ、錫、潤滑油、航空用ガソリン其他の重要物資を我物となし、其の餘剰は同盟國に分與することもあることとなつた。斯る次第で米國其物こそ年々六十萬トンのゴムを輸入したる彼等は、忽ちゴム飢饉に陥り、田舎の農夫まで一臺や二臺の自動車を持つてゐたことを誇りとしたるに、其爲めに全く足を失ふこととなつた。彼等が如何に動力に窮したるかは、ニューヨークの摩天樓が昇降機係りの罷業の爲めに、其の頂上に達するには五十幾分を要するといふやうな滑稽な始末に至つた。今日の米國が石油に窮するとか、肉に窮するとかいふことは、宛も河の中に溺れて水に困ると同一のやうな話であるが、それでも事實は全く其通りであつて、殆んど困つてゐる。錫の如き、キニーネの如きに至つても、全く米國では其品缺乏して當惑し抜いてゐる。

x

x

x

食糧問題

米英の食糧不安

我に七分の強味あり

且つ食糧から云へば、日本は戦争が百年持續しても窮することは無い。今日の内地でも六千五百萬石の米と、二千萬石内外の麥及び雜穀とが生産せられ、七千萬の人口を養ふことは決して難くはない。然もこれは現在のことにて、將來は更らに増産の見込は確實である。況んや日本の穀倉としては朝鮮、臺灣は云ふに及ばず、滿洲もある、佛印もある、タイもある、ビルマもある。若し聊か不自由といふことが今日ありとせば、それはそれらの物資を運輸するの船舶である。然もこれもやがては充實することは豫定の事實で、何等懸念すべきことはない。困る者は我れに非ずして却つて彼れである。英國は二週間航海が絶ゆれば、ロンドン六、七百萬の人口は忽ち餓死せねばならぬ。米國は本來食物には餘り窮しなかつたが、今日では土地はあつても、それを耕す者が缺乏し、従つて食糧不足を來たすに至つた。仔細に吟味し來たれば、物的資源に於ても我れには七分以上の強味があり、彼れには又た同様の弱味がある。

第九 人的要素

米英の豫想裏切らる

一以て千に當る日本軍

米軍主腦の證言

更らに人的資源に就てこれを觀察すれば、日本は支那事變の爲め五個年間も戦争を續けてゐたから、最早や人的資源も消耗して困り抜いてゐるだらうとは彼等の豫想であつたが、それが全く裏切られた。日本ではアングロ・サクソンの如く命を惜しむ者はないが、然も其の命を捨てる時には、一滴の血をも國家の爲めに最大有効に注がねばやまない。従つて日本の軍隊は敵の一と我れの一とを戦うて満足するものではない。我れの一を以て彼れの十に當り、時としては百に當り、千に當るだけの氣魄と精神とは常に持つてゐる。従つて戦争は長く續いても消耗することには極めて少い。今ま米國が如何に人的資源に苦しみ、悩んでゐるかを知らんと欲せば、米國陸軍次官バターンソン並に參謀次長ジョセフ・マクナネー中將が、上院の公聽會に於て左の如く證言したることを以て明白だ。即ち米國政府は戰略上一九四三年即ち本年までには七百七十萬の陸

米國兵站線の延長と勞働力不足

米國の人的資源配置

軍兵力が絶對に必要なだ。従つて今後年末まで毎月十四萬五千より十七萬五千の壯丁を動員せねばならぬこととなつた。然るに反樞軸軍の反攻作戦が進展するに従ひ、米國の兵站線は愈よ延長し、其の補給の爲めに人的資源を増加するの必要は倍々激しくなつた。現在米國の軍需工業には二千萬の勞働者が働いてゐるが、飛行機工場には既に勞働力の不足を告げてゐる。

x x x

今日米國の人口は、一九四二年に於て統計局の發表するところに據れば、一億三千三百九十六萬六千餘人であるが、其の人的資源を配置するに於て軍隊一〇・〇（單位百萬人、以下同じ）軍需二〇・〇、民需二〇・〇、農村八・〇、其他五・〇、勞働力總計六三・〇であつて、これを昨一九四二年末の配置即ち軍隊六・七、軍需一七・五、民需二〇・五、農村七・八、其他七・五、勞働力總計六〇・〇と比較すれば、總計に於て三百萬増加となり、本年中に於て軍、軍需及び農村への動員は六百萬

米國動員計畫は極めて困難

となる。更らにこれに加ふるになほ二百萬の動員を必要とする。然るに此の八百萬の新動員は何れよりこれを得んとするか。一九四二年末米國人口の十五歳以上六十五歳未満の者は男女合計八千七百萬程度、これを見ても米國の六千五百萬に對する動員計畫は極めて困難であることが明白だ。固より戰時生産局長ドナルド・ネルソンは「米國は六百四十萬の勞働豫備軍を有してゐる。うち八十萬は老人男子及び少年、百九十萬は婦人、五十萬は失業者、更らに一週四十八時間制の實施に依り五十萬の勞働者が浮ぶ筈である」と述べてゐるが、此の六百九十萬に上る勞働豫備軍を全部動員しても、必要人員八百萬を滿たすことの不可能なることは論を俟たない。

× × ×

或は又た「本年末まで米國政府は七百萬人の勞働者を必要としてゐるが、其の二百萬人は婦人勞働者より、百萬人は恩給生活者より、百萬人は雇傭年齢に達してゐない青少年より、更らに三百萬人は不急産業より

勞働者獲得の困難

婦人を軍隊に使用

陸、海軍補助部隊の必要

獲得する意向である」と云ふが、これも亦た果して如何であるか頗る困難である。現に今日食糧の缺乏は日常必需品の馬鈴薯さへも入手困難状態である。従つて本年末までには三百萬の農業勞働者を軍隊から補給し、又たメキシコ其他隣接諸國から移入するといふことになつてゐるが、それも頗る覺束なき話である。何れにしても彼等が人的資源に窮してゐることは論を俟たない。且つ如何に人的資源に窮してゐるかは、陸海軍に婦人を使用することの多大なることを以ても知らるゝ。概算するに本年度即ち一九四三年度の米國勞働人口は六千二百五十萬といふが、其内婦人勞働者は千八百萬に上り、軍需勞働者のみにても六百萬に上るといふ。何れにしても婦人が陸軍補助部隊となり、海軍補助部隊となり、陸軍補助部隊は正規陸軍部隊として、年齢限度は四十五歳であつたのを五十歳に引上げ、本年末まで三十七萬五千に及ぶ豫定と云ふ。海軍の如きも現在一萬七千、海兵隊四千五百にて、海軍補助部隊長官ストリター少佐は本年二月までに百九十萬の婦人補助部隊を直ちに必要とす

婦人勞働力に依存

ると言明してゐる。何れにしても斯く婦人を驅つて軍隊に使用するに至つたるを見れば、如何に彼等が人的資源に窮したるかを知るべきである。なほ人的資源委員長ポール・マクナットは全米飛行機生産勞働状態に關し「戦前飛行機生産従業者は全米勞働者の二パーセントに過ぎなかつたが、現在に於ては三十パーセント強に増加し、更らにこれを五十パーセントに高めねばならぬ」といふことを述べ、「従つて婦人勞働力に益益依存することの必要にして、米國の航空工業は女子工業に轉化するかも、知れない」と明言してゐる。

人口増減問題

更らに戦争を長く續くものと見積れば、人口の増減がまた見逃すべからざる問題である。英國の如きは人口に就て頗る悲觀せねばならぬ状態である。即ち一八七一年に於ては出生率が千人について三四・一であつたが、それが一九三七年には一五・三に下つた。従つて英國の人口も一九七〇年には恐らくは三千六百四十萬に縮小するであらうといふこと

悲觀すべき英の出生率

米國の出生能力減退

だ。米國の如きも其の人口の増加は概ね他國よりの移民を以て充てたるものであるから、それが減すれば従つて減するわけである。米國に於て女子の出生に耐へる者は、一九三七年には一〇〇〇人に對し〇・九六であつたが、今日では〇・八に下落したといふ。これに依つて見れば、米國の人口の前途は決して餘りに樂觀すべきものではない。これに反し我國の如きは、戦争中に拘らず、小泉厚生大臣が八十一議會に於て宣示したる如く、昭和十三年及び十四年には出生率が千人につき二十六であつたが、十六年には三十一に増加したといふ。而して死亡率は大正時代には二一・二であつたのが今日では一五に減少したといふ。従つて人口の増加は昭和十三年に於ては六十七萬であつたが、昭和十六年には一〇七萬になつた。これを英國の増加數十九萬に比較すれば、天地の懸隔ありと云ふも差支あるまい。

我國の出生率増加と死亡率減少

第十 靈的要素

戦争を職業視する
米國と神聖視する
日本

慾と名譽のため勝
利を欲する米英

死所を得ざるを怖
る我等

生きて忠良の臣、

死して護國の神と
なる

賊兵と神兵

攻むれば必ず取り
戦へば必ず勝つ

孫子の語

靈的資源に至つては問題がない。彼等は戦争を以て一の職業と認めて
ゐる。我等は戦争を以て一の神聖なる職分と信じてゐる。彼等は全く損
得勘定にて、職業意識以外には競争意識がこれに伴ふに過ぎない。既に
戦争をすれば敗けるよりも勝つが愉快であることは勿論だ。然も彼等が
其の勝利を喜ぶ心は、所謂野球に於ける、蹴球に於ける、若しくは拳
闘に於ける勝敗と同一であつて、それ以上の競争意識はない。彼等も慾
の爲め、名譽の爲め勝つことを欲し、勝つ爲めには相當の努力をするこ
とは當然であるが、然し彼等はそれに止まり、是非とも勝ち抜かねばな
らぬ、又た是非とも敵を撃滅せねばならぬといふ精神に乏しい。我等は
勝ち抜く爲めには水にも入り、火にも入り、體當りは固より自爆も亦た
更らに辭するところではない。要するに我れは死を怖れない。怖るゝと
ころは其死が死所を得るや否やといふ點である。我れと彼れとの相違は
ただ此に在る。彼等は靈的に於て、これと計上するものはない。職業意
識、競争意識の外には何物もない。我等は生きて忠良の臣となり、死し

て護國の神となり、以て皇國を無窮に擁護せんとするものである。即ち
彼等は東亞を侵略せんが爲めの賊兵であり、我等は東亞を擁護せんが爲
めの神兵である。齊しく勇氣と稱するも斬取り強盜の勇氣と、君國の爲
めに其身を效すの勇氣とは、其の精神状態に於て多大の相違あることは
論を俟たない。

×

×

×

日本が勝つか否やといふことは問題ではない。事實がこれを證明して
ゐる。日本は既に勝つてゐる、又た勝ちつつある。攻むれば必ず取り、
戦へば必ず勝つ。香港、ヒリッピン、マライ、ジャワ、ボルネオ、セレベ
ス、ビルマ、スマトラ、皆な然りとする。而して海軍に於ける眞珠灣及
びマライ沖の大戦果を以て始まり、珊瑚海海戦を以て中し、更らに即今
のブーゲンビル島沖に至るまで、事實がこれを證明してゐる。今更らこ
れに向つて言挙げする必要はあるまい。孫子が「主孰れか道ある、將孰
れか能ある、天地孰れか得たる、法令孰れか行はる、兵衆孰れか強き、

士卒孰れか練れる、賞罰孰れか明かなる、吾れ此を以て勝負を知る」と云うたが、全く其通りである。又た孟子が「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」と云うたが全く其通りである。更らに孫子が「必ず全きを以て天下に争ふ、かるが故に兵頓れずして利全かるべし」と云うたのも亦た其通りである。我等は以上に依つて我國の必勝を信じ、我が皇軍の必勝を信じ、且つこれを世界に向つて公言するものである。

第三篇 如何にして我等は必勝

するか（必勝の方策）

第一 必勝の信念

必勝の道は先づ必勝を確信するより來たる。必勝の信念なくして必勝の事の出で來べきやうはない。例へば諸葛孔明（*八〇すゐし）が出師の表（へう）に「成敗利鈍（せいばいりどん）に至つては臣が逆（ちんか）じめ賭（か）る所に非ず」と云つてゐるのは、事實其通りで、孔明の心事は誠に悲壯ではあるが、これでは必勝の信念とは云はれない。必勝の信念とは、如何なる大敵であつても、如何なる難局に遭遇（さうぐう）しても、石に喰（く）付（つ）いてでも勝ち抜くといふ其の信念である。此の信念の爲めに、即ち第一次世界戦争に際して殆んど城下（じやうか）の盟（めい）を獨逸より強要せ

悲壯なる出師の表

大敵、難局を克服して勝ち抜く信念

第一次世界大戦に於ける佛國の實例

主腦一人の信念は全體の信念

られんとするまでに壓迫せられ、其の士氣は沮喪して軍隊の間に暴動を來たしつゝあつた佛軍が、忽ち旗色を鮮明にし、敢闘精神を作興し、遂に勝利を博した。これは畢竟クレマンソーとフォッッシュの必勝の信念に由來すと云ふも決して過言ではない。即ち首相一人の信念は全國民の信念となり、主將一人の信念は全軍の信念となる。況んやそれが全國民の必勝信念においてをやだ。されば我等が如何にして米英を撃滅し得べきかといふ第一の要件は、必らず撃滅し得るといふ我が信念に基かねばならぬ。

× × ×

我國の立場は、第一次世界大戦のフランスの立場や、諸葛孔明が三國の間に處したる蜀の立場とは全く天と地ほどの相違である。既記の如く我等は必勝すべき凡有る條件を備へてゐる。されば必勝の道は其の條件を徹底的に實行すれば足る。但だ條件は具備しても、條件其物が自動的のものではない。これを運用し、これを利用し、これを善用し、而して

條件行使の覺悟

一億總動員の實を擧げよ

氣魄、精神、實行の一致を缺く

これを以て我が目的を達するの手段、方法となすは、皆な其の條件を行使する我等の覺悟如何に依る。

× × ×

然らば如何にして其の條件を行使するかと云へば、第一に一億總動員の實を擧げねばならぬ。我が一億國民は何れも 天皇陛下を中心として忠良の臣民たる誠を效し、國家の爲めに奉仕するといふ點に於て彼れ是れ疑ひを容るべき筋は無い。但だ今日に於て我等が最も遺憾とすることは、此の一億の臣民を打て一丸となし、其の總力を擧げて米英撃滅に向ふ氣魄と、精神と、而して實行とが伴はぬことである。即ち今日の總力戦なるものはただ名目のみであつて、事實の上に立ち入つて仔細に觀察すれば、一致を缺き、協和を缺き、互助を缺き、戮力を缺く。即ち十人の人が一の大なる石を荷ふも、銘々勝手にこれを荷ひ、其の氣合も、其の足並みも一致せざるが爲めに、十人の力が漸く其の半數にも満たぬといふが如き結果を來たすことである。一言にして云へば我國の現状は一

愛國心の實行不調和

億の同胞皆な愛國心を持つてゐつつ、其の愛國の實を表する點に於て調子が揃はぬ爲めに、其の効果が甚だ理想と距離がありといふことに外ならない。

第二 割據主義の打破

今日は敵に勝つ
の一事あるのみ
力の分散

凡そ國家の事多事ではあるが、今日に於ては唯一事あるのみだ。それは敵と戦ひ、敵に勝つことである。然るに一億の力をたゞ此の一點に集中することなくして、今まなほ平時の如く、銘々思惑次第に仕事をしてゐては、とても此の大目的を完遂することは出来ぬ。出来ぬ筈である。それは力が分かれてゐるからである。今日の要は一切の事をたゞ戦争完遂の爲めに、即ち敵に打ち勝つ爲めに仕向けることとすれば、宛も圓石を高山より轉ずるが如く、宛も河水を絶壁より落すが如く、必らず其の目的を達するに間違ひない。要は唯だ國民をして、今日の事はたゞ唯一の目的がある、其の唯一の目的に向つて總ての人が全力を注がねばならぬといふことを覺悟せしむるより急且つ大なるはない。この點に就ては東條首相は我等と意見を同じくし、當初よりこれを絶叫しつゝある。其志まことに諒とすべし。我等はたゞ其の反應が速かに實現せんことを願つて止まない。

東條首相の志諒とすべし

既に此の覺悟さへあれば、如何なる情弊も、如何なる苦情も、如何なる難題も悉く皆な刃を迎へて解くべきは必然である。我等は少しく事實に就て物語らんに、今日我が戦争完遂の目的を妨害する主なるものは何であるか。其一は割據主義である。この割據主義は三百年來封建割據の因習の致すところで、この爲めに多くの利益も得たが、同時に多くの損害を遺した。即ち今日我等が最も戦争完遂の大敵と認むる割據主義の如きも、我々が三百年來祖先より遺傳し來たつたものと云はねばならぬ。されば其の弊習が牢乎として動かし難きも亦た已むを得ざる勢と云はねばならぬ。然し已むを得るにせよ、得ざるにせよ、今日はこの割據主義

戦争完遂妨害の第一

封建割據の因習

狀を察すれば、何れも皆な割據主義である。單に一の會社が他の會社と對立するばかりでなく、會社の中でも亦た官廳と何等選ぶところは無い。延いて學校とか、新聞社とか、其他に於ても亦た決して然らずといふことは出來ぬ事實が存在した。理つておくが、我等は今日其通りであると云ふではない、過去のことである。然し今日全くそれが痕跡を絶つたといふことは、自から欺く外にはこれを云ふことが出來ない。然もこの割據主義は縣と縣との間にもあり、郡と郡との間にもあり、市町村と市町村との間にもある。今日に於て政府が近接各府縣を一區として、協議會を設けたのも、畢竟地方割據即ち隣縣を以て壑となすの弊害を矯正せんが爲めであると思ねばならぬ。而して實際果して幾許を打破し得たるか、我等は具體的に其の實效の現呈せんことを望んで止まない。

我等はこの點に於て更らに陸海軍に就ても、鳥の双翼、車の兩輪と云はれた如き役目を負ひつつ、過去に於ては動もすれば個々別々の獨自一

己を發揮し過ぎたといふやうな事實が皆無でなかつたことを否定するところが出來ない。今日に於て我が陸海兩軍が如何なる場合に於ても互助協和、互ひに同一目的に向つて死生を同じうし、安危を共にし、長短相ひ補ひ、緩急相ひ輔けて行くことは、誠に一段の美事として、我等はこれを感歎するが、更らに希望を云へば、この事實を希くは戰場ばかりでなく、一切の末梢神經にまでも延長せんことを希望して止まない。思ふに最近軍需省の新設せられたるも亦た陸海軍の兵器、糧食、凡有る軍需品に於て完全なる戮協を遂げんと欲するの目的に他ならぬものと信ずる。

要するに總力戰を妨ぐるものは全く割據主義である。この割據主義を根柢より打破せずんば、到底總力戰の實を擧ぐることは出來ない。これを大にしては軍、官、民の三者が全く協和し、宛も同心一體として働くことに至つて、始めてここに總力戰の實を擧ぐることが出来る。以上の道理は特に我等が云はぬまでも知れ切つたことである。然し知れ切つた

ことでも、それが全く實行せられざるに於ては、實行せらるゝまでは、これを繰返す必要がある。若しこのことが實現するに至つたならば、何を苦しんで斯る憎まれ口を利かんやだ。今日多くの人の怒りを冒して斯ることを云ふのも、畢竟米英を撃滅せんが爲めである。

第三 ユダヤ根性を去れ

我等は全きを以て敵に勝つべき極めて良好なる條件を持つてゐる。然るに我等は果して其の全きを利用し得るかと云へば、遺憾ながら其點に少からざる缺陷がある。例へば關西地方で林立したる煙突より煙を吐かざるものが幾許あるか。云はば即今猫の手でも借りたといふ忙しき時代に於て、煙突がなほ晝寢してゐるといふは極めて不思議の現象であるが、事實は其通りである。又た我國の産業戦士は第一線の戦士と同様に決死の覺悟で働いてゐるといふが、正しく其通りであらう。然るに事實に就て調査すれば、勞務者の不足と云はんよりも寧ろ缺勤者の少から

全きを利用するに
缺陷あり

煙突の晝寢

産業戦士の缺勤

生産必要の不徹底

原料横流れの虞れ

贈賄と收賄

ざることも指摘せらるゝ一である。何が故に勞務者が缺勤するかと云へば、それはアングロ・サクソン流の所謂罷業同盟でないことは明白であるが、恐らくは如何に産業が戦争に必要であり、殊に飛行機製作の如き焦眉の急であることが、未だ全く徹底せざる爲めと云はねばならぬ。今日に於ては斯く勞務者の缺勤する一方には、原料不足の爲めといふ問題があるが、其の原料が果して横流れする虞れはないか。軍器製造の原料として受取りたるものが、軍器とならずして他のものに變形したのではないか。それらの事を詮議立てすれば數限りはない。如何なる君子國の日本と云つても、一億人が悉く皆な聖人君子とは云へまい。其中には多少の不心得者があつたとて、それを問題に取立て、彼れ是れ論議するは決して公平の見ではない。けれども我等は裁判所の記事として、屢ば贈賄問題、收賄問題に接觸するは、時節柄最も不愉快とするところ。殊に最近の新聞には飛行機製作に關係する瀆職事件などが出で來つた。斯る事件の我等の眼に觸れるまでには、幾多の曲折を経て來たり、若し

くは中には我等の眼に觸れずして其場限りで結着を見たものもあらうが、何れにしても銃後國民の覺悟が未だ第一線の將兵の覺悟と水準を一にするこの出來ざるは、我等自から深く漸愧の至りに堪へない。我等は今更ら此に奸商征伐を強調するではないが、如何に商賣人は金儲けが本職であるといへ、國家あつての商賣である。日本國なければ日本國民の商業の成立つ筈はない。されば單に損得の打算から見ても、今日は私利を後にして公益を先にすべき場合である。然るに一方に於ては國家が生死存亡の戦争をなしつつ、他方に於て其の軍需品の製造を妨げ、若しくは凝滞せしめ、これを我利私慾に供せんとするが如き者あらば、これは正しく賣國の沙汰と云はねばならぬ。彼等もまさか自から國家に對して反逆を企てるなどといふ惡意を以てこれを行ふのではあるまいが、彼等にも所謂ユダヤ根性が傳染し、しみ込み、遂ひに此に至つたものであらう。何れにしても我等は口ばかりでなく今ま少し眞劍になつて銃後の勤めを勵み、眞に總力戰の實を擧げざる限りは、如何なる好條件を

我れに持つても、これを米英撃滅の爲めに效果的に使用することは出來まい。

第四 増産の敵

眞劍とは何事であるか。即ち大なる戦争の爲めには大なる犠牲を拂はねばならぬといふことである。大の蟲を活かす爲めには小の蟲を殺さねばならぬといふことである。國家の爲めには總てのものを犠牲とせねばならぬといふことである。然るに今ま我國の状態を見るに、此點に於て頗る不徹底の憾みがある。例へば我國に於て食糧問題の爲めに、當局者は全心を盡くしてゐる。而して一粒の米も、一粒の麥も、敵に對する一個の彈丸同様、若しくはより以上のものとして、其の増産を圖つてゐる。それにも拘らず頗る手緩きものがある。これは我等が曾て輿論に問うたことがあるが、例へば煙草製造の如きがそれである。若し政府が思ひ切つて煙草の生産を禁止するとせば、其爲めに四萬五千町歩は浮

禁煙では死せず

いて来る。然るに政府は何の必要ありて此の四萬五千町歩を見逃してゐるか。若し煙草を喫せずして人が死ぬと云はば、慶長以前の人は皆な死なねばならぬ。秀吉でも、家康でも八四相應の年までは煙草を飲まずして生きてゐた。今日でも喫煙きつえんせずして長命したる者は相當に多い。否な寧ろ喫煙者よりも多いものと我等は信じてゐる。天下泰平の時は喫煙も妨げないが、國家生死存亡の時は喫煙しなければ生存出来ぬといふこともあるまい。然るに政府は生死存亡の時にみすみす廣大の土地を殺して知らぬ顔をしてゐるではないか。又た酒類製造の如きも同様であつて、徳川幕府の時にさへ凶年には八五酒類の製造を節約せしめ、若しくは禁止したることもある。然るに今日は若干造酒の上に政府の手が加はつたとは云へ、我等はなほ手緩てねるしと思つてゐる。或はゴルフの如きも亦たさうである。ゴルフの爲めに土地が潰つぶれてゐるものは煙草ほどではなく、またこのゴルフの遊戯それ自身は必らずしも我等はこれに反對するものではないが、今日の場合ではゴルフ場などと稱して立派な耕作地、若しくは耕

造酒節約なほ手緩し

ゴルフによる耕作地の放擲

眞劍味の不足

作し得べきところの地を不毛の地として放擲はなつてするは、餘りに不親切ではないかと思ふ。斯かる例は幾許いくらもあるが、我等は必らずしも區々たる事實に就て彼れ是れ面倒な議論を持出すではない。但だ我國に於ては指導者階級がなほ眞劍味が不足ではないかと心配してゐるのみだ。

米國の兵器製造

米國では昭和十八年の一月より八月までに、既に飛行機十二萬三千臺、發動機三十四萬九千個、戰車五萬三千輛、大砲九萬三千門、重機は小銃、機關銃共に合せ九百五十萬挺、彈藥百三十三億三千九百萬發を製造したといふ。現に米國海軍長官ノックスは、本年十一月二十六日、海軍建艦狀況の報告を發表したが、其中で米國艦隊勢力は過去十一ヶ月間に二倍となつた。新艦艇の中には四十隻の航空母艦が含まれてゐると豪語した。斯かくの如く彼れが物的に如何に努力しつつあるかは我等も見逃すことの出来ぬところ。必らずしも我等は我が物的のみを以て彼れの物的と競争せんとするものではない。されど彼れの物的と我れの物的と互角の位

ノックスの豪語

置を保ち、而してこれに加ふるに我が人的及び靈的の力を以てして、而して始めて全勝を占むることが出来る。如何に彼れが飛行機に熱心であるか、最近陸軍航空部隊司令官アーノルドが、今ま新型重爆機、十トン乃至十五トンの積載量があつて、高高度を飛躍し、太平洋を無着陸にて往復出来るB二九號を創製し、これを以て日本本土を襲撃せんと公言してゐるではないか。我等はこれらのことを單に彼等が誇大の言を弄して、我れに對して威嚇を恣にするもののみとして閑却することは出来まい。それにしても我が産業界に於ける我等の覺悟は、官民を擧げて更に眞劍の努力を必須とすると信ずる。要するに我等は今ま一層眞劍味の加はらんことを、此際に向つて我が一億同胞に懇請するの必要を痛感する。苟くも眞劍とならば、我等は物的に於ても決して彼等に劣る筈はない。これ我等一個の私言でなく、現に理學博士、科學動員會議員、子爵大河内正敏氏の如きもこの事を論じ、量に於て米國に勝つには、先づ第一に事業家の頭を切り替へ、利潤の追求を拂拭せねばならぬと明言してゐる。これ宛も我等の云はんと欲するところを裏書きしたるものである。

第五 短期戦と長期戦 (一)

孫子は「彼れを知り己れを知れば百戰殆からず」と云うたが、これは今まなほ古への如く、戦争に取つては動かすべからざる一の鐵則である。されば我等は何よりも彼れを知らねばならぬ。彼れを知るに就て第一の問題は、短期戦か、長期戦かといふことに就て觀察せねばならぬ。開戦當初、若しくはそれ以前は、彼等は常に長期戦を以て我れを威嚇し、威嚇するばかりでなくこれを以て我れを壓倒せんと企ててゐた。即ち物を持たぬ日本國は長期戦となればひと堪りもなく、戦はずして自から潰れるであらうと云ふが彼等の計算であつた。然るに我が緒戦の赫々たる大戦果は、頑冥なる彼等をさへも、其の思惑を餘儀なく一變せしめた。彼等は惟へらく、日本は既に取るべきものを取つた。若しこの取つたも

長期戦は米に不利

のを日本が永久に保持することとならば、槌でも棒でも到底動かすことは出来ない。日本は必らず其の獲得したる資源を十二分に開發するであらう。其の獲得したる土地に堅固なる要塞を築き、難攻不落の鐵城を設くるであらう。又た要所々々には基地を設け、我れに對して何時でも進攻の出来る準備をするであらう。而して土着の住民も皆な日本人に懷き、若しくは日本人の力を信賴し、此に愈よ日本の根據地が出で來たるであらう。それで長期戦になればなるほど日本に勝目が多く、日本に多きだけ我等には少くなる。故に此際日本の攻略したる地盤が未だ安定せざるに先立ち、日本人の經營が未だ緒に着かざるに先立ち、而して日本内地に於ける軍需工業が我等に匹敵するだけの効果を擧げ得るに先立ち、短兵急に日本を撃破するが最も得策である、と。彼等が斯く考へ直したのも、彼等に取つては尤もの次第である。

短期作戦の一理由

且つ其の以外に彼等が其の目的を短期戦に一變したるに就ては、なほ

ルーズヴェルト四選の野心

米國の國民性

植民地氣質の増長

見逃すべからざる理由がある。第一は眼前に第四回の大統領選挙を控へたるルーズヴェルトが、其の満々たる野心を、よし永久なるアメリカ國王たらざるまでも、其の權勢に飽滿するの熱慾に驅られ、第四回目の大統領の椅子を狙ふ爲めに其の好餌として我れに打撃を加へんとすることである。言換ふればルーズヴェルトの選挙運動が、彼等をして短期戦に方略を一變せしむることとなつた。更らに他の理由は米國の國民性である。米國人は等しくアングロ・サクソン人と稱するも、それはたゞ幹部だけのことであつて、其の血液から見ればアングロ・サクソンの血液は英國に濃厚にして、米國には澹泊である。而して彼等米國人は今まなほ植民地氣質を脱却する能はず、寧ろ其の氣質が増長し、嫌でも應でも其の爲さんとするは、宛も駄々つ子の如く即日即行せねば腹の蟲が納まらぬといふが所謂國民性である。それで百年も掛つて日本を叩きつけるなどといふ如き間遠き話には、彼等は何等興味を感せず、宛も拳闘者が拳闘場に於て對手を叩きつけると同様、宇内環視の競場に於て日本

を叩きつけんとするは彼等の意氣込みである。彼れや是れやで我等は彼れが如何に我が太平洋の防禦線ほうぎょせんを突破し、我が本土にまで肉薄せんとしつつあるかは、論より證據、ブーゲンビルの戦争が觀面てきめんに我等に實物教訓を與へてゐる。ギルバート島戦争亦た然りだ。彼等は打たれても、叩かれても、如何なる損害をも顧みず、どしどし數と量とを以て我れを壓倒せんといきまきつつある。これは決して彼等の一時的出來心ではなく、日本が未だ十分なる陣立てが出来ざるに先立ち日本を叩かなければ、其の陣立てが全く充實したる後には、一指も加ふる能はざることを看破かんぱして、其の打算から盛んに我れに攻撃の鋒先きを向けつつある。我等もよくこの意味を諒解りやうかいせねばならぬ。これが即ち彼れを知る所以ゆゑである。

第六 短期戦と長期戦 (二)

曾て米國財務長官モーゲンソーは曰く、「ハンプブルグの破壊には三億四千四百六十萬ドルを要した。従つてベルリンの破壊には其の六倍の二十

億七千六百萬ドルを要する。即ち米國國民一人當り十八ドル七十六セントの負擔となる」と。斯かくの如く算盤づくめで彼等は所謂いは金の力を以て我れを壓倒せんとしつゝある。彼等は金力さへあれば何事も出来るものと信じてゐる。即ち金で鐵を得、鐵で武器を得、武器で日本人をやりつけるといふことである。曾て我が或る參謀士官が語るところに依れば我々は一以て敵の十に當つてゐる。ただ我々に取つては飛行機が少いことと、敵の大砲が我れに數十倍することと、彈丸に至つては千百倍の量を以て打込んで來ること、其爲めに我々は多大の損害を受けつつ、密林を求めて轉進せねばならぬ苦境に立つてゐる。我々は戦闘には勝つてゐるが、ただ敵の火砲、鐵量に壓倒せられてゐる。云はば敵の鐵量じゆうりやうが縱横無盡じゆうわうむじんに威力を揮つてゐるのである。いまソロモン戦線に於ては敵の絶對優勢なる飛行機と鐵量との真正面に、我が盡忠の士が立ちはだかつてゐるが、日本の後方生産陣が十分に生産増強に蹶起けつきし、戦力を増強し、米國反攻の鼻柱はなはしらを叩きつけ、ぐつと押しまくつた時こそ、

長期戦には長期戦
短期戦には短期戦

生産増進の妨害は
國家に對する反逆

こゝに始めて勝利は獲得せられる。

と。これは寔まことに我等國民に取つては、天啓の訓諭として服膺ふくようせねばならぬ。如何に大河の水を控へても山火事を救ふことは出来ない。日本が歲月と共に充實の度を加へ、やがては彼れと對立する位地に押進むことありとしても、今日に於て劣勢なるに於ては、焦眉せうびの急には間に合はぬ。

されば長期戦には長期戦を以て應じねばならず、短期戦には短期戦を以て應じねばならぬ。我等が軍需品の生産に向つて更らに軍、官、民の一大協力を提唱し、一大猛進、一大精進を絶叫するはこれが爲めである。斯かる場合に我が懷ふところの損得などを勘定して、軍需原料を闇から闇に葬つたり、若しくは個人的の感情や打算の爲めに其の増進を妨害し、然らざるまでも増進の序列を攪亂かくらんするが如きは、實に其心は然らざるも、其行ひは國家に對する反逆はんぎやくと云はねばならぬ。

× × ×

斯く云へばとて決して長期戦を閑却せよと云ふではない。彼等は短期

隨處に自給自足

戦を希望するも、我等が彼等の注文通りに參らざるに於ては、勢ひ長期戦とならねばならぬ。されば我等は焦眉の急に應ずると共にまた百年の後までも考慮する必要がある。されば我等は此點に就ても遠く慮おもんはかり、深く謀らねばならぬ。我等は此點に於て諸葛孔明の所謂「屯田持久の策」の頗る賢明なるを知る。即ち一方に於ては其勢險、其節短、利那の間に雌雄を決するの氣魄きぱくを以て彼れを壓倒すると同時に、他方に於てはこの戦争が百年繼續するも少しも油斷なく、少しも緩怠くわんだいなく、戦時状態を恒久永遠こうきうえいゑんに持續せねばならぬ。屯田持久の策と云ふのは所謂の食糧も、兵器も隨處に自給自足せしむる所以にして、將兵のある極めて近距離に、其の消耗せうかうを補充するに最も必要な機關を常設し置くことだ。これさへ出来れば航路の上に如何なる障礙しょうがいが出で來たつても何等心配はない。幸ひに我が攻略したる地方は皆な物資豊富にして、食糧は固より兵器を製造し、船舶を建造するが如きことも決して不可能ではない。我等は決して軍需品製造所を一所に集合するのみが得策とは思はない。最も

安全なるは自給自足の法である。この方針に依つて一切の計畫を定むることは、刻下急務の一と云はねばならぬ。

第七 教育の根本義

更らに眼を轉じて見れば教育の一事がある。今日の國民學校兒童も十年を経れば立派な兵士となる。今日の中學生徒も五年を経れば立派な兵士となる。今日の専門學校、大學生は即ち既に立派な兵士である。彼等に對して言葉通りの國民皆兵の訓練を施すことと同時に、學校其物も兵營同様の規律を以てし、教育其物も亦た専ら其の方面に力を注ぎ、而して各々其の専門に就て學習せしめ、其の學習したるところのものを以て軍國の用に供する準備をなさねばならぬ。今更ら云うて甲斐なきことであるが、我が國家は毎年幾百千萬の國費を投じて如何なる教育を施したるか。今日の所謂る危険思想、不良思想、アングロ・サクソン思想なるものは、總てとは云はぬが多くは皆な國家が製造したるものである。共

産黨の温床は何處の學校であつたか、自由主義の苗圃は何處の學校であつたか、今日に至るまでなほ其の餘喘を保ちつつあるは何處の學校であるか。仔細に點檢すれば、國家は根本的に我が教育を改善するの必要がある。

固より教育勅語は教育の標準であつたが、この標準はただ國民學校に於てのみ然るものであつて、中學に至れば漸くそれが稀薄となり、専門學校、大學に至れば殆んどそれが没交渉となつたる如き傾向が、總てとは云はぬが往々にして見受けられた。然るに大東亞戦争は其の副産物として、我が國民に多大の影響を及ぼし、然も其の影響は最も眞純、無垢、新鮮、活潑なる青年層より現れ來たつた。我等が先に云ひし如く、今日に於ては子は親を起し、弟妹は兄姉を起し、生徒は教師を起し、學生は教授を起し、勞務者は資本家を起し、大衆は知識階級、支配階級を起す。これ實に一方から見れば國運興隆の吉兆であるが、他方から見れば如何

武愚となるも文弱
となるなかれ

に我が指導者、支配階級若しくは先輩、長老なるものが現實と游離し、天下の大勢に落伍しつつあるかを證明したるものと云はねばならぬ。何れにしても今日は教育の方法を根本的に改善し、藤田東湖の所謂「寧ろ武愚となるも文弱となるなかれ」の氣分を旺盛ならしめねばならぬ。固より武愚を理想とするではない、飽くまで文武兩道に進達することを努めねばならぬが、殊に自暴自棄、文弱遊惰、醉生夢死、ただ享樂専門とするが如き者を養成するが如きことは、教育其物が自から國家破壊を以て目的とするものと看做さるるも、決して申譯はあるまい。

× × ×

誤れる學問の理念

教育の根本義に就て我等は一言せねばならぬ。教育はただ立身出世を目的とするものとし、凡有る試験地獄を経て大學に入り、高等文官試験を通過すれば、それで學問は全く終了したと思はしむるに至つたのは其罪誰れにあるか。斯る理念の下に學問したるものであるからして、折角官吏となつても、それはただ職業にありついたと云ふに外ならず。即ち

官吏を商賈視す

教育其物の根本的
誤謬

責任感の喪失

官吏を以て一個の商賈と看做し、立身出世、多くの俸給を獲得し、多くの名譽を獲得すればそれで十分であるといふが如き人物を養成し來たつた。その結果は、如何に官紀の振肅を唱へ、如何に吏道の刷新を説き、如何に責任觀念の旺盛ならんことを叱咤鞭撻しても、容易にそれが實行せられぬのは、畢竟教育其物の根本的誤謬より來たりたるものと云はねばならぬ。官職を職業と心得れば、なるべく勞少くして效多きことを望むは必然である。斯の如き觀念の下に責任感などの存すべき筈はない。出來得る限り責任はこれを他に嫁し、效果は我れ自からこれを收むるといふ風儀を生じ來たるは、誰れ彼れの差別なく從來の教育を受け來たりたる者は皆自然らざるはない。偶まそれと同じからざる者あらば、此に始めて我等は異常なる出來事として感戴止む能はざるに至る。

第八 國民精神の淨化

斯く云へばとて現在斯の如しと云ふではない。大東亞戦争は日本人に

大東亞戰は日本國民に取つて被認である

精神淨化の諸例

取つては一つの被^はひであり、一つの被^みである。國民の精神はこの大なる試練の中に今まや淨化^{じやうくわ}しつつある。其の淨化せられたる一二の例を擧ぐれば、例へば山口中將^{やまぐち} 賀來少將^{がら}の如き、例へば加藤軍神^{かとう}の如き、若しくは海員中にも長崎丸船長^{ながさき}が自決して其の責任を果したるが如き。斯^かる例は山ほどある。而して我が中尉、少尉の陸海將校が、將來山の如き望みを荷^なひつつも、更らに一點だも顧慮するところなく、慨然として體當りをなし、自爆をなし、自から進んで虎穴に入りつつあるが如きは、餘りに其事が多くしてこれを擧ぐるに遑^{いとま}あらない程だ。若しくは最近海陸の猛鷲たらんことを志願する青年俊秀輩の如き、士官學校や海軍兵學校に入校すべき機會もあれば便宜もあるを顧みず。前途の立身出世などは一切眼中に置かず、ただ皇國の爲めに其身を以て敵に當らんとするの勇猛心に至つては。所謂^{いは}斯^かの如きを始めて日本男兒の精神と云ふべく。我等は斯る例を今日に見出すことの餘りに多くして、實に感激に堪へざるものがある。我等は我が中年以上老輩に至るまで、皆なこの殉國青年^{じゆんこく}の

日本男兒の精神

心意氣に就て大に學ぶところあらねばならぬことを、此に敢て強調する。

第九 人的資源と人口増殖

人ありて物あり、
靈あり

世に人的資源、物的資源と併^なび云ふも、物あつて人あるに非ず、人あつて物がある。されば我等は何よりも人的資源に重きを置かねばならぬ。人あつて物あると同時に、人あつて靈がある。人間あれば人間の力もあれば精神もある。故に國家百年の隆昌^{りゆうしやう}を期する者は、何よりも最も人的資源を増殖することを圖^{はか}らねばならぬ。我國に於て青少年の精神、意氣の旺盛なるは既記の通りである。然るにこの國家に取つて無二^{たか}の寶であり、同時に國家の主なる生命力であるべき青少年の多數とは云はぬが、動^うもすれば肺結核に襲はれつつあることは、誠に我等をして寒心せしむるものがある。今更ら盜を捕へて繩^{なは}を絢^なふが如きことと笑ふ勿れ。何時でも思ひついた時を手始めとして其事を爲さねばならぬ。我等は此に我が厚生政策の最も重要にして、これも亦た一種の戰鬪準備たること

厚生政策も一種の
戰鬪準備

人口の増殖

敵の悪策人口制限

を忘却してはならぬ。

現状を以て満足すべからず

更らに一言すべきは人口増殖の一事である。今まや我國は人口に於て、敵國英米に對し其の増殖の度は優位を示してゐること既記の通りである。即ち過去に於ては所謂敵國の悪策たる人口制限にうかと乗つて、必らずしもそればかりとは云はぬが、我が人口の増殖率は頗る遺憾であつた。即ち昭和十三、四年頃には人口一〇〇〇に對し出生率は二六であつた。然るに昭和十六年にはそれが三一に増加した。死亡率も大正年間には二一・二であつたが一五に減じた。且つ乳兒の死亡率も明治年間には一五・六であつたが、昭和十六年には減じて八となつた。従つて昭和十三年には六十七萬人の増加であつたが、十六年には二百廿一萬の出生に對し死亡百十四萬で、差引き百七萬といふ物凄い増加振りを示してゐる。英國の年々十九萬人の増加に比すれば、人意を強うするに足るものがある。以上は既記の通りであるが、然し我等はなか／＼これにて満足すべきではない。假りに人口の増殖率を我が隣國たる中國及び蘇聯、若しくは印度に比すれば、印度に於ては人口一〇〇〇に對して三六であり、蘇聯に於ては四三・三であり、中國に於ては確實の數は明白でないが四五・〇である。これを我國の昭和十三年二六・七に比すれば勿論、昭和十六年の三一に比してもなほ我れの及ばざるところのもの遠くある。我等は決して現状に満足すべきものではない。

我が人口増殖は支印、ソに及ばず

佛國の如きは從來人口に於ても獨逸と匹敵し、若しくはこれを凌ぐものであつたが、ただ個人主義と享樂主義とは佛國をして極端なる産兒制限をなさしめ、其爲めに其の人口は獨逸の半ばに減じ、人減じて物のみ存し、従つて其物も亦た人口に從つて減ずるに至つた。大國をして小國たらしむる道は、何よりも先づ産兒制限に如くはなし。我等は既に明治の末から大正に掛けて、この惡魔の福音にたぶらかされた。幸ひに魔藥が骨髓に泌み透らざる以前に覺醒して今日に至りたるが、更らに一層こ

大國をして小國たらしむる道

惡魔の福音

— 142 —

の方面に力を加へ、國策を以て人口増加を獎勵し、保護し、擴充せねばならぬ。獨逸に於ては一千萬の壯丁を動員しつつ、人口増殖のことを重要視し、時を計つて兵士の歸休を命じてゐる。我等も亦たこれに倣へと云はざるが、この人口増殖を以て太平時代の惰力に一任せず、積極的に國策として其道を盡くさんことを希望して止まない。

第十 自力本願

更らに我等は如何なる場合たりとも、専ら自力に依つて敵を擊滅することを覺悟せねばならぬ。世には日・獨・伊三國同盟の力に依つて敵を擊滅するといふことに重きを置き、従つて動もすれば獨・伊兩國の旗色を見て喜憂をなす者がある。同盟國であれば喜憂をなすは當然のことであるが、然も當初より獨逸とイタリアとは専ら歐州に於ける新秩序の指導者であり、我等は東亞に於ける新秩序の指導者であることは、條約の明文にも特筆大書せられてゐる。従つて大體の目的に於ては共同一致す

るが、其の働く部面には自から銘々責任の區劃があり、限定がある。彼の英米兩國が蘇聯を引張り込み、若しくは英國が米國を引摺り、米國が英國を引摺る如く、互ひに他人の禪にて相撲をとらんとするが如き卑怯千萬、横着至極の行爲は、獨・伊は勿論、我が皇國に於ては斷じて爲すべきことでもなく、又た爲すを屑しとすべきことでもない。

× × ×

今まやイタリアは不幸にして同盟を裏切りたるに拘らず、頼ひにムツソリーニ總帥が、イタリアの一角に據つて新イタリア社會共和國を組織し、正義の旗幟を翻へしてゐる。まことに祝着の至りである。而して獨逸は百難を突破し、千艱を乗越え、大陸を以て一大要塞化しつつある。我等はその必らず終局の目的を達成することを疑はない。然も同時に我等は東亞に於ては其責に任じて、斷じて他力に依存してはならぬ。獨逸も未だ曾て如何に東部戦線が困難なればとて、我れに向つて援兵を乞うたことはない。我等もビルマ戦線に於ても、ソロモン群島の戦線に於て

與國を煩はさず

自力を以て敵に當る覺悟

も、從來未だ曾て與國を煩はしたることはない。又た今後とても煩はさんと欲する料簡はない。我れは飽くまで我力を以て我が責任を果さんとするものである。彼れも亦た飽くまで彼れのを以て彼れの責任を果すであらう。斯の如くにして同盟の實は自から擧がつて来る。畏くも宣戰の大詔を捧讀すれば、我が日本が米英の無理非道に對して慨然起ち上つたのは、當初より自國の力を以てこれに當るの覺悟あつてのことだ。今更ら彼れ是れ傍目をする場合ではない。我等はただこの意味に於て、所謂前にも云うた通り、全きを以て彼等の分散したる勢力と争はねばならぬ。

第十一 ルーズヴェルトとチャーチル(一)

敵を知る上に於ては、敵の主將の何者たるを審かにせねばならぬ。主將と云へばマツカーサーやら、マウントバッテンの徒輩を云ふのではない。眞に其の統帥者を云ふのである。今日に於て何と云つても北米合衆

米英統帥者に對する知識の必要

案山子でも木偶でもない

國の統帥者は大統領ルーズヴェルトであり、英國のそれは首相チャーチルである。我等はこの二人に就て適當なる知識を有し、正確なる評價を付けておく必要がある。世間ではただルーズヴェルト、チャーチルと云ふが、彼等は決して案山子將軍でもなければ、木偶大王でもない。彼等は皆な其の實力を以て、現在の位置を力取したるものであつて、決して僥倖でもなければ、偶然でもない。少くとも彼等が我等の敵として立向うてゐるのは、彼等の腕が然らしめたるものだ。この點に於ては兩人とも同一である。

× × ×

今更らここにルーズヴェルトの傳記を説く必要はない。世間では彼れの血管にユダヤの血が存してゐると云ふが、それは明白なる證據はない。ただルーズヴェルトは「我等は和蘭のロツテルダムより移住したるものであつて、其の遠き先代にユダヤの血が存したるや否やは、我等も亦たこれを知らぬ」と云つてゐる。然し彼れが否定せざるところに依つ

ユダヤ色濃きルーズヴェルト

功利、無節操、老
癯、貪慾なるル大
統領

テオドル・ルーズ
ヴェルトとフラン
クリン・ルーズヴ
ェルト

て見ても、亦た彼れの系圖を質して見ても、恐らくはユダヤ人の血が彼れの血管には濃厚であると云ふべきであらう。然し其の穿鑿は専門家に任せる。とに角ルーズヴェルトはユダヤ人と親密なる間柄であり、彼れの身邊はユダヤ人を以て圍繞せられてをり、殊に彼れの爲めに財布を掌つてゐる財務長官モーゲンソーはユダヤ人の錚々たるものであるのみならず、ルーズヴェルト彼れ自身も亦た功利主義なる點に於て、無節操なる點に於て、老癯なる點に於て、金錢上に於て潔白ならざる點に於て、ユダヤ人と共通性を多量に保持してゐる。

第十二 ルーズヴェルトとチャーチル(二)

ルーズヴェルトを説く時には、勢ひ先きの大統領テオドル・ルーズヴェルトを連想せねばならぬ。兩家は元と同根より生じ、テオドル・ルーズヴェルトは長兄の家であり、現大統領フランクリン・ルーズヴェルトは弟の家である。彼等には多少共通の點がある。兩者ともニューヨーク

兩者の類似點と相
違點

州に生れ、兩者ともハーヴァード大學に學び、兩者ともニューヨーク州會の議員となり、兩者ともニューヨーク州知事となり、兩者とも海軍次官となり、兩者とも大統領となつた。但だ前者は副大統領としてマツキンレーの暗殺に遭うて大統領となり、次回に當選し、更らに大統領タフトの後に三回目の大統領として候補を争うたが、敗北した。然るに現大統領は三回接續して大統領となり、更らに機會もあらば第四回目までも繼續せんとするの野望を持つてゐる。前者は共和黨であつたが、後者は民主黨である。然し現大統領の夫人エリナの父エリオット・ルーズヴェルトは大統領テオドルの唯一の弟にして、エリオットは實にフランクリン・ルーズヴェルトの名附親である。従つて彼等の結婚の時には、當時の大統領たるテオドル・ルーズヴェルトは、其姪を嫁する役目を負うて結婚式場に臨んだ。結婚式が済んでも一般の會衆は皆な大統領に敬意を表するに専らにして、殆んど其の花婿、花嫁に挨拶することさへも忘却したとて、今ま以て彼等夫婦はそれを一つの笑話に残してゐる。然し現

一つの笑話

ウイルソンの感化を受けたるルーズヴェルト

大統領ルーズヴェルトが政治の洗禮は、其の親類の大統領よりも、寧ろ民主黨出身の大統領ウイルソンに受けた。彼れはウイルソンを崇拜し、ウイルソンより得るところ少くなかつた。それは何れかと云へば寧ろウイルソンの世界政策、ウイルソンの自からは是なりとするところ、ウイルソンの獨り自から聖人君子振つて他人を相手にせざるところなどであらう。言ひ換ふれば、彼れはウイルソンの獨善主義、ウイルソンの傲慢自尊、如何なることをなしても自分一人は惡事を爲さざるものといふ、自から欺くの心を相傳してゐる。

徹頭徹尾の功利崇拜者

先代ルーズヴェルトは評判ほどの英雄、豪傑でもなければ、大人高士でもなかつた。然し彼れは確かに愛國心もあり、米國の運命を信する大なる主張もあり。且つ一片男らしき、義侠とまではいかぬが、それに幾きものがあつた。然るに現大統領ルーズヴェルトはそれらの何物もない。ただ彼れは徹頭徹尾の功利崇拜者であつて、一大投機者と云ふよ

無責任なるルーズヴェルト

所謂るニュー・ディールの實體

り以外に適當なる稱號はない。勿論彼れは臆病ではない。然し彼れの臆病でないといふことの裏には、彼れは極めて無責任である。彼れは如何なる失策をしても、如何なる迷惑を他に掛けても、それを頰冠りして過ごすだけの大膽がある。而して其の主義主張の一貫などといふやうなことは、彼れに於ては、一の破れたる靴下ほどの價值もない。彼れは如何なる相手に對しても、それを巧くまるめるだけの口説を持つてゐる。彼れの所謂るニュー・ディールなるものは、前大統領フーヴァーの^{九九三}收縮經濟政策の後を承けて、出來得る限りの通貨を造り、出來得る限りの租税を取り、出來得る限りの公債を募り、而してこれを街頭の市民に撒き散らしたのに過ぎない。彼れが一時世直し大明神と大衆より謳歌せられたるも、云はば國民の懷から金を絞り上げて、これを街頭の民衆にばら撒いた結果である。然し其の術策も屢ば繰返せば其の効果を失ひ、八方塞がりの時に、國民の心を他に轉せしめ、遂ひに彼れの東亞に對する帝國主義は開戦の已むを得ざるに至らしめた。云はば日米戦争の發頭

日米戦の發頭人

人はルーズヴェルトであつて、其の眞因は畢竟彼れがニュー・デイルの失敗を塗り消さんとする、所謂いはずの檻よろ樓ろうかくしに外ならない。然し心臓の強さに於ては世界第一であつて、若し彼れと横綱を争ふ者あらば、それは恐らくはチャーチルであらう。曾てジョン・フリンが云うた、「彼れが大統領の職に就いて以後七年間、残るものは一千一百万人の失業者と、個人貯蓄の壊滅くわいめつと、農業問題が依然として解決せられざるのみである。彼れは社會改善の爲めに凡そ二百二十億ドルを費したが、然もそれは今まで報償するところはなかつた」と。彼れは自家の懐ふところ勘定には嚴密であるかも知れぬが、國民の懐勘定には全く無茶苦茶だ。

第十三 ルーズヴェルトとチャーチル(二)

我等は更らにチャーチルに就て一言せねばならぬ。チャーチルは門地から云へばマルボロー公の二男＊九五ランドルフ・チャーチルの子にして、云はば公爵家の孫である。門地に於ては固もとより間然するところはない。彼

れの父ランドルフ・チャーチルは、十九世紀の下半に於て流星の如く天に輝きたる政治家であつたが、又た流星の如く地に墜おちた。彼れの母は米國のニューヨーク・タイムスの發行者であつたゼロームの娘であつて、云はば彼れは英米兩者の合の子である。従つて其の氣分も亦た其通りであつて、彼れはちよつと英骨米肉えいこつべいにくと云ふが如き氣分の男である。凡そチャーチルの一生ほど面白きものはなかつた。若しルーズヴェルトが生れながらにして富家の子であり、銀の匙さしを含んで生れたとすれば、チャーチルは公爵の孫ではあるが、銅の匙を含んで生れたと云つてよからう。彼れは英國貴族の尋常の道を歩かなかつた。英國貴族はイートン中學よりオックスフォード大學に入るか、然らざればハーロー中學よりケンブリッジ大學に入るか。何れにしてもこの兩中學、兩大學の何れかに入るべきであるが、彼れはハーローから士官學校に入り、青年期にして軍隊に身を投じた。然も彼れは尋常一様の兵士たるに甘んぜず、或はキューバに赴き、或は印度に赴き、或はアフリカに赴き、＊九六ボア戦争に

於ては捕虜となつたが逃走して英國に歸り、議員選舉を争うて敗れたが、やがては議員となつた。固より彼れは傳統的な保守黨であつた。然るに其の大立者たるチエンバレーンチエンバレーンに楯をつき、其の關稅改革論に反對して自由黨となり、以來自由黨の閣僚となつて凡有る要職に就いたが、第一回世界大戰の際には海軍大臣として其の機宜よろしきを得、海軍操練に事を寄せて艦隊を集合し、其儘分散せずして戰時に入り、頗る手際を見せた。彼れが政治上に於ける經歷は浮沈極まりなく、軍令部長であるフィッチャー元帥と喧嘩を始めて遂ひに其の喧嘩は兩成敗となり、やがて陸軍少佐として第一線に出で、更らに歸還して軍需大臣になるなど眼の廻るほどの變化であつたが、いま悉くこれを語る必要はない。但だ今日の戰車が、彼れの創意でないとしても、彼れの獎勵に竣つところ少くなかつたことは懸値なき事實にして、戰車の今日あることは彼れに負ふこと少くないと云はねばならぬ。彼れは實に鄙事に堪能である。煉瓦を積むことにも素人以上の腕前を持ち、煉瓦職工組合員の一人であ

る。又た馬上打球に於ても超群の技を持つてゐる。繪畫も素人離れがしてゐる。園藝やら、魚類を飼養することも知つてゐる。然も最も彼れの長技は文章と演説である。英國には能文の士は今まなほ少くないが、所謂グランド・スタイルなるものは殆んど罕れである。然るに彼れは其罕れなるスタイルの持主である。彼れの世界戰爭に關する「世界の危機」は、其の分量に於てはロイド・ジョージの「世界大戰回想録」と相ひ對抗するが、其質に於てはとてどもロイド・ジョージの及ぶところではない。たとひ其中に彼れが餘りにも手前味噌を並べ、自家辯護であつたとしても、それを差引いてもなほ必傳の作と云はねばなるまい。演説に至つては彼れは非常なる準備と用意とを以て臨み、先づ自からこれを筆記して修正し、更らにこれを暗記していざとなれば宛も即座に口を衝いて出づる如き流暢を以て語つてゐる。彼れの前に出でたる英國首相ポールドウインはバイブの持主で、凡有るバイブを集めてゐたといふが、チャーチルの部屋に行けば或は勞務者の帽子があり、或は畫家の帽子があ

り、或は狩獵者の帽子があり、或は陸軍帽、或は海軍帽、英國紳士の通
常帽など、まさにこれ各種帽子の展覽會である。然もまた即今物資窮乏
の際にも、なほ毎日十六本の巨大なるシガーを吸はねばやまぬといふほ
であるから、これを見ても彼れが並大抵の代物でないことがわかる。

第十四 ルーズヴェルトとチャーチル(四)

然しそれらよりもなほ彼れの特色は、彼れが戦争が飯よりも好きで、
所謂鬪志満々たることである。彼れは英國の政界に於ては、何人より
も其の腕前を認められつつ、殆んど何人よりも信用せられなかつた。そ
れは彼れが餘りに自己中心的に、他人と協調を保たず、勝手次第の振舞
ひをなすからである。然しながら彼れは常に其の對手をヒットラー總統
に置き、ヒットラーを眼の仇となし、獨逸の再興を豫言し、豫じめ英國
がこれに備へることの必要を絶叫した。然も彼れは何人よりも受け入れ
られず、ただ詭激の言論を以て人心を攪亂する者と看做されたが、愈よ

チェンバレーンの宥和政策が失敗の烙印を捺さるるに際し、今まはチャ
ーチル以外に何人もこの難局を擔當する者が無い爲めに、遂ひに彼れは
舞臺の片隅より引き出されて海軍大臣となり、更らに一躍して彼の父ラ
ンドルフ・チャーチルが畢生の念願として遂ひにこれを贏ち得なかつた
首相の位置を占め、以て今日に至つた。若しヒットラー總統微りせば、
彼れは恐らくは英國政界の大浪人者として、大野武士として一生を終つ
たかも知れぬ。然るに英國の大事、大難は遂ひに殆んど總すかんの標的
である彼れを起して英國の大宰相となした。

× × ×

人或は曰く「彼れは見掛けによらぬ神經質の男である。夜も碌に安眠
は出来ぬ。又た演説をしても、最初の數分間は言語明晰を缺きしどろも
どろの態である。但だやがて聽衆の顔が彼れの眼に映じ來たるや、彼れ
の懸河の雄辯は始めて出で來たる」と。けれども圖太き男に神經質の者
は少くなく、神經質の男に圖太き者も少くない。彼れに於て神經質であ

つたとて決して不思議ではない。彼れは實に精力の權化である。午前七時より午後十一時まで、ただ三時—四時の午睡一時間を除けば、勞働を以て終始してゐる。彼れの秘書は公私併せて六人もあり、夜でも晝でも、汽車の中でも、自動車の中でも、時も所も構はず、考へが浮かべば忽ち口授して筆記せしめ、其の秘書をして奔命に疲れしむるといふ。然も彼れ自身は何等屈託するところはない。彼れには一種氣輕なところがある。彼れは陽險であつて陰險でない。それで總すかんと云はれても、それは寧ろ總不信用と云ふ意味であつて、個人としては相當の愛嬌もあり、宴會の席などでは寧ろ面白き男として驩迎せられてゐる。要するに彼れも亦た一個の怪物である。

× × ×
 彼れは其の心臟の強さに於ては、ルーズヴェルトと其の優勝賞を争ふに足る。曾て佛國の危急に際し、首相レイノアの英國に救ひを求むるや、チャーチルは即座に英佛合併案を提出してこれを誘うた。即ち轉んでも

只是起きぬといふ彼れの度胸は此に於て見るべしだ。彼れは今日蘇聯に叩頭して、蘇聯を以て米國を制せんとしてゐる。米國に叩頭して米國を以て蘇聯を制せんとしてゐる。勞働黨に叩頭して保守黨を制せんとし、保守黨に叩頭して勞働黨を制せんとしてゐる。宛も手品師が多くの玉を空中に投げ上げて、それを巧く手玉に取ると同様の技術を持つてゐる。然も技術ばかりでなくそれを行ふには不屈の勇氣と、不息の智泉と不撓の辛抱力と、不斷の精力とを併せ兼ねてゐる、何人が英國に存在するも、今日のところ彼れに代る程の人は容易に見出だされぬであらう。そこを英國人は熟知してゐるから、嫌でも應でもチャーチルをして其の自由の手腕を發揮せしむるものと見ねばならぬ。而して彼れが東洋人に對する輕蔑は、英國貴族の傳統を受け、彼れが東洋を以て巨利を博するの市場とすることは米國商人の血脈を引き、何れにしても彼れは東洋に於て其志を逞しうせんと欲してゐる。彼れは曾て颺言して曰く、「何れ遠からずヨーロッパの仕事が片付くに相違ない。其上は全力を擧げて東洋にか

かるであらう」と。それは即ち獨逸を退治したる後には、日本を退治することを意味するは云ふまでもない。而して我等はこの煮ても焼いても喰へないルーズヴェルト、チャーチル兩人を相手として決闘することを忘れてはならぬ。

第十五 敗北思想

凡そ必勝に最も大切なるは、戦闘意志の熾烈なることである。戦争に於ては如何なる場合に於ても、最も避くべきことはなまぬるきことである。殊に戦闘に對するなまぬるき根性は、一膜を隔てたる敗北思想に他ならない。世の中にはいづれ遠からず講和の時節も來るであらう。其の場合には米英とも握手せねばならぬ。其の時節到來を今まから準備して、必要もなきに彼等の感情を刺戟するやら、彼等をして我國に對し怨恨を抱かしむることはなるべく控へ目にするがよしといふ者あるが、語を換へて言へば、どうせ喧嘩の仲直りをするから、叩くにもなるべく怪

戦闘意志の熾烈が
大切

品を變へたる敗北
思想

我させぬ如く叩けといふ話であつて、即ちこれは品を變へたる立派な敗北思想と云はねばならぬ。

× × ×

米英の敵意の現は
れ

元來米英の我れに對する敵意は、我等が想像するほど生ま易しきものではない。彼等は病院船と知りつつ、故らにこれに向つて魚雷を發し、爆彈を落したではないか。彼等は何等戦争に縁りのなき我が在留國民を、宛も敵國の捕虜同様、否なそれ以上に残酷に取扱ひ、殆んど我が同胞をして死に抵らしめんとし、然も死する以上の苦痛を嘗めしめたではないか。現に米日親善の使節と標榜して我國に在留したるグルーの如きも、今まは抗敵思想、抗日思想の宣揚を御用第一として、全國を行脚しつつ宣傳して廻つてゐるではないか。グルーは曰く

強大なる敵日本を打倒するには、ただ日本の軍事力のみでなく、歴史的なる日本人の民族精神と傳統を抹殺するところまで行かねばならぬ。

グルーの日本打倒
論

と。又た曰く

我等は日本の軍隊さへ殲滅すれば日本の脅威を除去し得るが如く速断すべきものではない。日本の脅威の抜本的除去は、日本の軍隊を絶滅したる上、歴史的なる日本の精神、傳統まで抉り出だしてしまはぬ中は、日本に勝つたといふことは出來ない。

と。これはグルー一人の意見ではない、ルーズヴェルトが日本人を世界より葬り去れと云つたことは、必らずしも單に大言壯語とのみ看做すべきではない。彼等は正さしく斯くまで日本を憎んでゐる、又た恐れてゐる。斯る場合に於て、我等が彼等に對して何を以て酬ゆべきかといふことは多言を要しない。我等は我等の生存を擁護する爲めに、我等を滅絶せんとする敵に向つて一大打撃を加ふるは、これ我等の祖國と祖先とに對する一大任務である。

第十六 神 經 戰

彼等の日本に對する戦闘は、單に太平洋心の群島や、若しくはビルマ・ルートや、若しくは支那の邊境に散在して、機會もあれば我れを空襲せんとするが如きことに止まらない。彼等は更らに別の方面よりして我等を根本的に覆へさんとしてゐる。其の前衛戦は何であるかと云へば、即ち神經戦である。彼等は日本の強點を知らざるまでも、其の弱點に就ては知り盡くしてゐる。彼等の缺點は日本を買下げたる點であつて、買被つたる點ではない。日本人が未だ内地を外敵より襲はれたることなき歴史を持つてゐることを知り、日本内地を空襲することは日本人をして其の神經を感亂せしむるの好手段たることを考へ、其爲めに彼等は盛んにこれを畫策してゐる。現に米國陸軍第一航空部隊司令ウォルフ・ロイスは日本空襲に就て曰く「我れは日獨兩國の軍事的中心地を徹底的に爆撃し、殊に對日戦に於ては米國空軍は日本が未だ曾て經驗したことの無いやうな新しき地震をお見舞して、日本の眞珠灣空襲のお返しをするものである」と演説してゐる。語を換へて云へば無差別空襲を目的としてゐる

る。即ち曾て昭和十七年四月十八日、彼等が東京上空を空襲し、國民學校の兒童と知りつつこれを掃射したるが如きは、ただ其時、其場所に限つての偶然の出來事ではなく、それが即ち米國の日本に對する國是である。斯の如くにして我れに向つて神經戰を挑まんとしつつある。

× × ×

彼等をして我が沿岸に近付けしめざるは第一の上策である。然も如何なる網でも、總ての魚がこれを潜らないとは限らない。我等は出來得る限り彼等の空襲を未然に防止するも、萬一のことを覺悟せねばならぬ。其の場合に於て我が國民が、ロンドンを空襲せられたる英國人以上に、ベルリンを空襲せられたる獨逸人以上に、所謂日本精神を發揮してこれに對抗し、これが爲めにたとひ如何なる損害を蒙つても、宛もこれを一時の雷雨と心得、冷然、平然、毅然としてこれを通過するに於ては、彼等は策盡き、術究まつて遂ひには彼等自から消耗し、云はば獨り相撲を取つて自から倒るるの仕儀に陥ることは必然である。故に彼等の神經

戰に對しては、第一は未然に防ぐこと、第二はこれを抗爭、擊退すること、第三はこれを無視して泰然自若たること、この三者が必要である。特に我等は其の第三の泰然自若といふ點に重きを置いて、我が國民が豫じめ其の腹帯を締め、其の覺悟を爲しつつあらんことを希望する。

第十七 思想戰

それよりも更らに深く、廣く、長く、且つ效果的であるは思想戰である。彼等は彼等の所謂一世紀に近き間、日本が殆んど思想的にアングロ・サクソンの植民地となつてゐたことを熟知してゐる。今日彼等と交戦しつつあるも、日本の思想界にはなほアングロ・サクソン崇拜の思想が残存することを知つてゐる。所謂燒木に火が付き易く、彼等が一度びこの残存する英米思想に火を點すれば、忽ちこれが一般に燃え上るものと彼等が妄信するも、彼等としては無理ではない。此に於てか彼等は正面に於ては堂々戰艦、巡洋艦、航空母艦、驅逐艦、それに配するに千

思想戦はコレラ、
ベストの如し

萬の飛行機、幾多の魚雷、凡有る有形的反撃を企て且つ行ひつつあるも、それよりもより深刻に、より效果的の方面をその思想戦の分野に見出だしてゐる。今まこの思想戦が如何なる方面に動き、如何なる手段、方法を採りて行はれつつあるかといふことに就ては、我等は今まここにこれを語るべき自由を有しない。然もこれは我國に取つてはコレラの如く、ベストの如く、實に恐るべきものであつて、我等は銘々この思想戦に對して十二分の防禦を以て満足するばかりでなく、我れより進んで彼れを撃破するの手段、方法を講せねばならぬ。

× × ×

思想戦は戦闘の主力

如何にアングロ・サクソン人が宣傳を以て戦争の前衛となすかは何人も知るところ。然も其實は前衛どころではない、思想戦其物が戦闘其物である。少くとも戦闘の主力である。著者は曾て英國の新聞王と稱せられたる子爵ノースクリフの我國に來遊するや、偶然面會の機を得たるに、彼れは著者に向つて如何に第一次世界大戦争に於て思想戦が主要なる働

ノースクリフの誇言

ロールバツハのノースクリフ評

虚偽の製造

ロイド・ジョージの感謝狀

きを爲したるかを語り、揚々として得色があつた。これは實に間違ひなき事實である。彼れは思想戦に依つて戦争の終極を六ヶ月早めたと云ひ、又た思想戦に依つて戦争の大團圓を告げたと云つてゐる。事聊か誇大に似たるも事實は全く其通りである。獨逸人バウル・ロールバツハは曰く「ノースクリフは全く道義的良心無き漢である。彼れの日常の道具は嘘を云ふこと、粗獷なること及び冷血なることである。然も彼れはこれらの道具を使用するに於ては最も長技を有してゐた」と。即ち彼れは一例を擧ぐれば、獨逸人は脂肪が缺乏したるが爲めに、敵の死體を煎じて其脂を使用したなどといふとてつもない虚偽を製造し、獨逸の如何に野蠻且つ非人道であるかを世界に流布せしめた。されば戦争の終るや、當時の英國首相ロイド・ジョージはノースクリフに向つて斯く感謝狀を申し送つた。「予は貴君の無上なる働きの成功、而してそれに依つてオーストリア及び獨逸の敵勢をして劇的の壞崩に陥らしめたることに與かつて最も有力であつたことの、多大の直接證據を持つものである」と。要す

レヒベルクのノースクリフ評

ノースクリフの後
にノースクリフあり

るにノースクリフの成功は、敵も味方も同様にこれを認めてゐる。然もこれは即ち宣傳戦の成功である。而して宣傳戦は即ち思想戦である。

曾てアーノルド・レヒベルクは云うた。「世界戦争に於て英國の勝利にノースクリフが現實的に寄與したることは疑ひを容れない。戦争中彼れが英國の宣傳部の指揮をやつたる仕事は、空前の成功として歴史に残るであらう。ノースクリフの宣傳はよく英國人民の心理を諒解したるばかりでなく、獨逸人の知識的特性を正さしく諒解した。従つて英國の味方及び中立國の國民に就ても、勝手にこれを諒解し、且つ勝手にこれを誘導した」と。これらは皆な敵からも味方からも與へられたる證文である。然しノースクリフ逝いてノースクリフ無しとは云はれない。今日英米兩國がラジオを通じ、無線電信、電話を通じ、文書を通じ、又は秘密なる人を通じ、凡有る有形無形のものを使用して思想戦に用立てつつあることは、第一回世界大戦の當時に比すれば更らに倍するものがある

宣傳に不器用なる日本人

他を以て己れを量らず

ことを知らねばならぬ。

世の中に宣傳に不器用なるものは、云はば日本國民である。これが一面に於ては、不言實行となつて、日本國民に特色附けることもあるが、其の自から不器用なると同時に、動もすれば敵の宣傳に乗り易きことも、日本人の一短所と云はねばならぬ。我等は何事にも主觀的であつて、己れを以て他を量ることを知つて、他を以て己れを量ることを知らない。その爲めに我國に於ける智勇辯力の士も、動もすればとんでもない間違ひを來たすことがある。即ち孫子の「彼れを知り己れを知れば百戦殆からず」と云うた訓言を此に改めて見直さねばならぬ。

第十八 自由主義の一掃

我國に於ては共產主義の猛獸毒蛇よりも憎むべきことは皆な知つてゐる。然し自由主義が更らに恐るべきものであることには、殆んど注意す

る者は少い。されど自由主義はお玉杓子の如く、共產主義は蛙の如きものである。自由主義は毛蟲の如く、共產主義は蝶の如きものである。概ね共產主義は自由主義が行き詰つたところに出で來たるものであつて、自由主義を歩行する者が其の關門に行き當り、其の一關を排し來たるところに共產主義は出で來たるものである。されば共產主義を杜絶せんとせば、先づ自由主義に警戒を加へねばならぬ。我國が共產主義の最も流行したる時は、他方に於て自由主義の最も流行したる時であつた。明治末期より大正の上期を回想すれば、我等は實に今日でも戦慄を禁ずる能はざるものがある。

× × ×

我等は單に東亞よりアングロ・サクソン人を退却せしむるばかりでなく、アングロ・サクソン人が植ゑ附けたる自由主義を一掃せねばならぬ。自由主義は即ちアングロ・サクソン思想である。この思想が存在する間は、久しからずして再びアングロ・サクソン人が頭首を擡げ來たる

ことは疑ひを容れない。^{*一〇〇}王陽明は「山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し」と云うたが、敵の軍艦や、飛行機や、戦車や、魚雷やは皆なこれ山中の賊である。然も自由主義は即ち心中の賊である。この賊を退治せざる以上は東亞は決して新秩序を樹立することは出来ない。

第十九 和を以て貴しと爲す

我等は敵に勝つことにのみ氣を取られて、敵に勝つ爲めには味方相互に諧和せねばならぬといふことを忘却してはならぬ。先づ國內的に云はんに、今日は社會を擧げて戦時態勢となつた。然るにこの戦時態勢といふことを心得違ひして、日本人固有の美質たる禮儀や、作法や、好意や、親切や、一切抛ち去つて、寧ろこれを抛ち去ることが戦時態勢などと誤解するに至つては、甚だ以て痛歎の至りである。

× × ×

試みに汽車に乗つて見よ、電車に乗つて見よ、バスに乗つて見よ、凡

有る人と人との接觸する場合を眺めて見よ。我等が曾て經驗したる日本人の美德は、全くとは云はぬが殆んど影を潜めてゐる。支那の文章に「室に怒り市に色す」と云ふが、今日の我が同胞は誰が爲めに怒るか知らぬが、街頭に於て愉色婉容の掬すべきものは、鉦太鼓で探しても殆んど見つかからない。偶まそれを見出せば、沙漠の中で綠地を見出したる如く、感激に堪へないほどである。いづくんぞ知らん、これは本來日本人の通有性であつたことを。何故にこれを失うたかに至つては、我等は今まここに其の理由を吟味する邊はない。或は事が多くして、人が少いといふことで、其爲めに荷物までも投げ飛ばすといふが如きことになつたか、其爲めに何れの受付でも皆な佛頂面で相手を叱り飛ばすといふ氣分になつたか。何れにしても斯の如く人心が荒れずさんでは、長き戦鬪を繼續するには甚だ以て迷惑至極と云はねばならぬ。著者は久しき以前米國に遊び、曾て曰く「米國では女が男の眞似をなし、人間が物體の眞似をなす」と。人間が物體の眞似をなすとは、宛も人間が一種の天然力の如く、物

を取扱ふ上に於て手心、手加減をなして、其の程よき調和をなすだけの親切も無ければ、ゆとりも無いことを意味してゐた。然るに今日我國に於ても亦た人間が物體の眞似をなして、我等が撃滅しつつある米國人其儘の仕振りをなすが如きことを、街頭に於ても、公館に於ても、人類の接觸する場所に於て見出すことは、甚だ心苦しき極みである。

×

×

×

我等は今日は一人で一人前の仕事では追附かぬことを知つてゐる。一人で十人前の働きをなすには、何處にか手を抜く必要もあらう。然しながら其の氣持だけは飽くまでも丁寧に、人間味を發揮したいと思ふ。如何なる場合に於ても人間味は必要であるが、國家一旦緩急の際にはこれ程必要なるものはない。我等は今ま此に我が同胞に向つて、人間味を何とかして取戻して貰ひたいといふことを一言するを禁ずる能はざるものがある。殊に官吏とか、智能者とか、富豪とか、所謂一般の指導者階級に向つて切に希望して止まない。而してこの心を以て我が東亞共榮圈

内の諸國、諸民族、近くは其の留學生にまでも及ぼす時に於ては、東亞共榮圈内の所謂修和、親睦は期せずして來たすであらう。要するに我等はこの際聖德太子の「和を以て貴しと爲す」との十七條憲法の一句が、最も重要なことを提唱する。

結 語

第一 アジアは一なり

我等は過日東京に開かれたる大東亞會議が、絶後と云はざるも空前の出來事として誠に新たなる光明を認めてゐる。然るに其の「アジアは一なり」と云ひ、一なる理念を具體化させる爲めに大東亞會議が出來たりたるに際し、其の使用せられたる言語は何くの國の言葉であつたか。我等は當然東亞の主盟たる日本語が一般に使用せらるべきものと信じてゐた。然るに日本語は不幸にして未だ普及せず、これに反し英語は東亞の隨處に普及したるが爲めに、ヒリッピンの代表者、ビルマの代表者、印度の代表者等は何れも英語を使用するの餘儀なきに至つた。英米を撃滅する會議に於て、英語が其の用語となりつつあるといふことは、寧ろ

言語と思想とは唇
齒の關係あり

アングロ・サクソン
陰謀の排除

滑稽と云はねばならぬ。これを以ても如何に英米の勢力が深く東亞に植
ゑ附けられてゐるかを知らねばならぬ。言語と思想とは唇齒の關係があ
る。アングロ・サクソン人が英語を東亞に植ゑ附けたるは、即ちアング
ロ・サクソン思想を植ゑ附くる所以にして、アングロ・サクソン思想を
植ゑ附けるは、アングロ・サクソンの覇權を永く、久しく東亞に逞しく
せんと欲する所以である。されば我等は斯る空恐ろしきアングロ・サク
ソンの陰謀が徹底してゐることに氣付き、飽くまでこれを排除すること
を努めねばならぬ。英語を學ぶは彼れを知る爲めには一の方便である。
然しながらこれを學んで他を閑却するは、全く精神的に彼れの奴隸とな
つたるものである。我等は近き將來に斯る會議の催さるる時に於て、少
くとも日本語を以て其の正規の用語とせんことを今より希望して置
く。

今日何人も「アジアは一なり」と云ふが、其「一」とは何であるか。

アジアは一なる所
以

自由主義は弱肉強
食を意味す

東亞の根本主義

言葉も必ずしも同一ではない、文字も必ずしも同一ではない、政體も
必ずしも同一ではない、人情、風俗も必ずしも同一ではない、歴史
は固より同一ではない。銘々の歴史もあれば、銘々の文化もある。各國、
各民族皆なそれぞれ確乎として動かすべからざる個性を持つてゐる。然
るに「アジアは一なり」とは何故ぞ。それは思想の根本義即ち人生觀に
於て一致點がある爲めである。語を換へて言へば、アングロ・サクソン
の自由主義と全く對蹠的思想に依つてアジアは立つてゐる。アング
ロ・サクソンの思想は功利的個人主義である。進化論の法式を人類生
活の上に實施するが自由主義である。即ち自由は競争を意味し、競争は
鬭争を意味し、鬭争は優勝劣敗を意味す。斯の如くにして弱肉強食は
自由主義の極樂でもあれば、デモクラシーの天國でもある。然るに我が
東亞は人類相愛、社會相親、萬邦協和を以て根本主義としてゐる。即ち
自由の代りに協同を意味し、競争の代りに互助を意味し、戰鬭の代りに
平和を意味する。其の結果は即ち共存同榮、所謂「己れ達せんと欲せ

ば人を達せしめ、己れ立たんと欲せば人を立たしむ」は我が東洋思想の根柢である。

第二 東亞思想の根本義

されば大東亞共同宣言に於て掲げられたる五個條は、皆な其の根本義を表象、敷衍したるものに他ならない。即ち

一、大東亞各國は協同して大東亞の安定を確保し、道義に基く共存共榮の秩序を建設す

といふ其の道義なるものは、自由主義と對蹠的にある。即ち人類相愛の主義である。第二條即ち

一、大東亞各國は相互に自主獨立を尊重し互助敦睦の實を擧げ、大東亞の親和を確立す

とあるは、其の根本義を事實の上に實行したることを意味する。以下三條即ち

文化の昂揚

經濟發展

資源開放

善を以て惡を退治す

一、大東亞各國は相互に其の傳統を尊重し、各々民族の創造性を伸暢し、大東亞の文化を昂揚す

一、大東亞各國は互惠の下緊密に提携し、其の經濟發展を圖り、大東亞の繁榮を増進す。

一、大東亞各國は萬邦との交誼を篤うし、人種的差別を撤廢し、普く文化を交流し、進んで資源を開放し以て世界の進運に貢献す

と云つてゐるのは、何れも皆な根本義より演繹し來たつたるものにして、今ま此に逐一説明する必要はない。要するに第三は傳統尊重、文化伸暢の義を明かにし、第四は互惠提携、經濟繁榮の義を明かにし、第五は萬邦交誼、世界進運の義を明かにしたるものである。我等は單にアングロ・サクソンの優勝劣敗、世界を擧げて生ける地獄となすが如き思想を退治するばかりでなく、更らにこれに代ふべき東亞共通の思想を以てすることに於て、始めて「アジアは一なり」と云ふことが出来る。惡を以て惡を退治するではない、我等は善を以て惡を退治するものである。